
シャナドゥーの歌と馬

葉梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャナドゥーの歌と馬

【Nコード】

N62270

【作者名】

葉梨

【あらすじ】

暁都の売れない用心棒の絶影は、商家の使用人のオルリコに雇われてシャナドゥーを目指すことになった。オルリコが命がけでシャナドゥーを訪ねる目的とは……？ 中華&モンゴル風の旅ファンタジー。

1・護つてみせる／暁都

いつものことだからと言って、心が痛まないなんてことはない。
予想していた展開だからと言って、予定通りの行動を取れるとは限らない。

「倍額払うから別の用心棒に変えてくれ。こんなガキに大事な商品を任せられるかよ」

客の野太い声が苛立ちも露わに彼の解雇を告げる。彼はまたかと落胆した。

「まあまあ旦那」

応じたのは彼自身ではなく、彼の親分だった。

「こいつはこの通り背は低いし、顔は童顔だし、いまいち気迫もねえですが、馬を操らせたら右に出る奴ありませんし、馬上で弓を射らせたら天下一、剣の腕にも太鼓判を押します。間違はなく、我が『衛世館』^{えいせかん}の期待の星です」

親分は朗々と語りながら背後の建物を見上げた。官吏の屋敷より広い土地に、中流家庭の家屋より小さい屋敷が建っている。赤茶色の瓦を載せた白壁の建物の入り口には金色の文字で「衛世護民」と書かれている。ここは世を守り、人々を守る、用心棒の派遣業者だ。
「おい、黙つてねえで、てめえも何か言えよ」

大柄な親分に小突かれ、小柄な彼はぎこちなく胸を張って客を見上げた。客は鋭い眼光で彼を睨み、何か言えるものなら言ってみろとばかりに顎を突き出して両腕を胸の前で組み合わせる。彼は平然とした態度で頭をかいた。

「えっと、まあ、なんつうか、大船に乗ったつもりでこの俺にどーんと……」

「何と言われてもおれの気は変わらねえよ。この商談にはおれの人生がかかってんだ。だいたいなあ、おめえ、これまでロクな仕事してねえじゃねえか」

やべえ。彼は内心でぎくりとした。客が彼の鼻先に彼の仕事の履歴書を突き出したからだ。これを持ち出されると大抵契約は破談になる。

「的頭村へ村人の護衛——所要半日、だの、官吏の娘の嫁入りを護衛——三本先の通りまで、だの、おめえ」

「的頭村の畑の番は二カ月やったかな。狼や野犬をずいぶん退治したぜ」

「畑の番と隊商の護衛を一緒にするな！」

よし、この客は諦めよう。彼はさっさと見切りをつけて意識を周囲へ散らした。屋敷裏の訓練場から弓を射る音が途絶えている。恐らく、非番の用心棒たちがみんなで聞き耳を立てているのだ。彼は舌打ちしたいのを堪え、表通りを行きかう人々を何とはなしに見た。

「あ」
何とはなしに見たにも関わらず、彼の視線は誰かの視線と真正面からかち合った。大きな黒い目が人の波の向こうからじつと彼を見ていた。

「なあ、あんたとも長い付き合いだよな？倍額出す、別の用心棒に変えてくれ。そうじゃなきゃ他所を当たるぜ」

客が親分に詰め寄っている間にその黒い目は人ごみの向こうに消えて見えなくなった。

暁都は皇帝のお膝元だ。静かで平穏な富裕層の街、活気の溢れる町人の街、ならず者の行きかう治安の悪い貧困街など様々な顔を持つ。「衛世護民」の看板を掲げた用心棒派遣業者「衛世館」は商店の立ち並ぶ大通りの端に位置している。

衛世館を訪れる者のほとんどが商人で、仕事の内容は十中八九、商品の護衛だ。町から町へ商品を運ぶ際、大事な荷物を盗賊から奪われないよう商人は用心棒を雇うのだ。ありとあらゆる物品が暁都

に集まり、売買されて全国に散る。暁都では用心棒になれば食いつぶれることはないと言われている。

だが、彼は食いつぶれそうだった。何故なら用心棒らしいまともな仕事に関わったことがないからである。

「おまえの背がもう少し高けれりやなあ」

彼の親分——赤兎せきとがぎしりと音を立てて木の椅子に座った。赤兎は用心棒を絵にかいたような男だ。立っていると天井に頭が届きそうだし、赤兎の腕は彼の太股より太い。頬と顎には髪と同じ赤色の短い髭を生やしていて、細い眼は鋭く野性的だ。数年前に四十歳になつてからは衛世館の経営と後継者の育成に専念するようになり、よほどの大仕事でない限り用心棒として現場に立つことはなくなつたが、赤兎が日々の鍛錬を怠ることはなかった。

すでに卓を挟んだ反対側に座つていた彼は一瞬だけ赤兎を見上げてそっぽを向いた。食事の時間が終わつた薄暗い食堂には二人の他に誰もいない。皆、訓練に励んでいるか護衛の仕事に出かけているかのどちらかだ。

「俺だつて好きでチビなわけじゃねえ」

彼はため息を吐き出して天井を仰いだ。彼の言葉に同意するかのようには彼の腹が鳴った。橙色の西日が差しこみ始めた食堂に数秒の沈黙が落ちる。

「俺、用心棒に向いてないんだよ。名前まで変えたのに」

親から貰つた名前を捨てたのは衛世館で用心棒になるための訓練を初めてすぐ、三年前の十二歳のことだった。彼は草原の遊牧民の家に生まれたが口減らしのために衛世館に売られて来たのだ。

「おまえの名前はダセえ。もっとかつこ良くて迫力のある名前をつけてやる」

今以上に小柄だつた彼に赤兎はにやりと笑つて言った。

「おまえは今日から絶影ぜつえいだ。そう名乗れ」

それが三国志に出て来る馬の名前だと知つたのは随分後になつてからだった。英雄の愛馬の名前を授かつたにも関わらず、彼は相変

わらずダサイ仕事ばかりしている。

「おまえが用心棒に向いてないってこたあまずねえよ。それは保証してやる。身長だってまだ伸びるだろ、あと何年かの辛抱だ」

「辛抱なんて言葉、聞き飽きた」

ふてくされて頬杖をつく絶影に、赤兎はおかしそうに笑って言った。

「そう言うけどな、見た目が弱そうってのは、おまえの最大の武器でもあるんだぜ？」

用心棒らしからぬ小柄な体型を最大の武器呼ばわりされても嬉しくない。絶影が言い返そうとした時、食堂の扉が開いて最近衛世館に名を連ねた若い用心棒が顔を出した。

「親分、客っす！」

赤兎はすぐに椅子から腰を上げ、いつになく神経質に襟元を正した。

「おう、張さんとこのだろ？そろそろ来ると思ってたぜ」

「噂のお馬鹿さんがあんなに可愛い女の子だとは思わなかったっすよ」

「噂の……女の子？」

彼は思わず食いついた。衛世館に女性が入り出すことはまずない。あつたとしても夫婦や兄妹など男連れがほとんどだ。まして女の子がやって来たことなどいまだかつてないことである。

「それより、訓練場まで聞こえたぜ、絶影。また客に嫌われたな」

からかうような口ぶりで言いながら新入りの用心棒は絶影に歩み寄る。落ち込んでいた絶影はいつもなら受け流せるような悪口にむっとして立ち上がった。

「喧嘩なら買っぜ、おっさん」

「やめろ」

相手に食ってかかろうとした絶影の顔の前に、赤兎の太い腕が音もなく止めに入った。

「絶影、おまえも来い」

絶影の襟首を軽くつかみ、赤兎は食堂を出た。絶影はされるがままに食堂を出て廊下を進み、応接室の扉の前でようやく解放される。「でも、仕事の話だろ？」

絶影が小声で訊ねると、赤兎は彼の背中を思い切り突き飛ばした。彼は扉にぶつかるとまいと両腕を振り回して踏みとどまる。

「何が『でも』だ。この無駄飯食い！」

「いつてえ、だって、どうせまた俺の顔見た途端に断るんだぜ」

「今度ばかりはそんなことにはならねえよ」

「何で？」

赤兎は絶影の問いに答えず扉を開けた。客人は西向きの窓を背に座っていて、強い日差しがその人のシルエットを黒く染め上げていた。それは女の子だった。頭頂部で髪をお団子に結った卵型の小さな顔や細い首、襟足から落ちる遅れ毛やまろやかな肩の曲線にどきりと胸が鳴った。

「よう、風が冷たくなってきたな」

立ちつくす絶影を尻目に赤兎は彼女の背後の窓を閉めた。金色の光が遮られ、応接室はにわかに穏やかな薄闇に包まれる。闇に目が慣れると彼女の顔が見えた。目が合った。さつき門の前で絶影をじっと見ていた大きな黒い目だった。

「オルリコ、これはうちの用心棒の絶影。絶影、彼女は張さんこの使用人のオルリコだ。知ってるだろ？」

オルリコと呼ばれた女の子は絶影と同じくらいの年齢だった。あまり外に出ないのか肌は白く、黒髪はつやつやと輝いている。頬と唇はわずかに紅く、特別美人ではないが愛らしい顔立ちをしていた。オルリコは赤兎と視線を交わし、意を決したように深く頷いた。赤兎はほっとしたような顔で絶影を振り返り、オルリコの向かいに腰を下した。絶影は我に返って赤兎の隣の椅子を引いた。家族以外の女の子と向かい合って座るなんて生まれて初めてかもしれない。腰を下しながら彼は乾いた口を開く。

「知ってるっていうか……君、あれだよな？張さんとこの我儘な双

子に顎で使われてる鈍い子だろ？双子の気まぐれで隣町に飴玉一個買いに行かされたり、的頭村に石ころ拾いに行かされたりするって噂、マジ？」

「鈍くて悪かったね」

緊張のあまりの失言だった。

「世間の噂と、本当のことは違うよ。君なら分かるよね？」

怒ったように眉根を寄せて絶影を睨むオルリコの黒い瞳には失望が浮かんでいた。少年と少女の穏かでないやりとりに赤兎は冷静に割って入った。

「絶影、オルリコはシャナドゥーへ行って用事を済ませて暁都に戻る。おまえはその護衛をしろ」

「シャナドゥー？それも我儘な双子の気まぐれなのか？」

張家の我儘な双子と使用人のオルリコの話は有名だ。オルリコが往復すると数刻かかる隣町に飴玉一個買いに行かされたりとか、丸一日がかりで湖のほとりの的頭村へ石ころ拾いや花摘みに行かされたらしいとか、世にも馬鹿馬鹿しい噂話を彼も時々耳にする。だが、シャナドゥーは暁都から馬で七日ほどかかる。往復すれば二週間だ。旅慣れているわけでもない、ただの商家の女使用人に、思いつきでそのような旅を強いるのは、いささか度が過ぎているのではないか。

「金華さんと銀河さんに御用を申しつつあったって言ってよ」

オルリコは不満そうに唇を尖らせ己の主人たちを擁護した。わけのわからない命令を御用と呼んでいるあたり、彼女は双子の気まぐれに従順なのだろう。彼女は町中の心ない人間によってたかって笑われていることを知っているのだろうか。

「御用って、何しに行くんだよ？まさか飴玉買いに行くんじゃないよな？」

冗談で言っただつもりだったが、オルリコは傷ついたような顔をして口をつぐんだ。

「げっ、マジ?!」

「飴玉じゃないよ。時間がないから道中で説明する。明日、夜明け前に青龍門の前でね。——それじゃあ、赤兎さん、おやすみなさい」
オルリコは椅子から立ち上がり、小走りで応接室から出て行った。明日、夜明け前に青龍門の前で。絶影は去り際のオルリコの言葉を口の中で反芻する。

彼は仕事を、断られなかった。

それも暁都とシャナドゥーを往復するという大きな仕事だ。この際、我儘な双子のくだらない御遣いであることは脇に置いておこう。彼は単純に、嬉しかった。

「こら、ぼけつとしてねえで家まで送って来い」

呆然とする絶影を赤兎が小突き、彼は慌ててオルリコを追った。

彼は衛世館の門を出たところで彼女に追いついた。

「張さん家まで送るよ」

振り向いた彼女は印象的な黒い瞳で彼を見つめて短くお礼を言った。彼が彼女の横に並ぶと二人の身長は同じくらいだった。地面に落ちた彼らの影の大きさもあまり変わらない。

彼は背が高いわけでも体格がいいわけでもなく、強面でもないし野性的でもない。仕事を任された喜びも大きかったかが、それ以上に彼女の考えていることが気になった。彼女は何故、彼のような用心棒に仕事を任せる気になったのだろう。

二人はお互いに黙って夕暮れの大通りを歩き、十分ほどで富裕な商人の住む住宅街に辿り着いた。

「もうすぐそこだから、ここでいいよ。どうもありがとう」

オルリコはもう一度礼を言い、絶影から離れて黒い瓦屋根の大きな屋敷に向かって歩き出した。遠ざかる彼女の背中がどうしてか自分より頼りがいがあるように見えて、絶影は疑問を抑えられなかった。

「なあ」

呼びとめるとオルリコは足を止めて振り返った。

「さつき、衛世館の門の前で俺が客に振られるの見てたんだろ。何

で俺なんかに護衛を任せてくれるんだ？命がけって言ったら大げさかもしれないけど、危険な旅だよ。俺、どう見ても強そうじゃないだろ？」

二週間の旅のほとんどが草原にテントを張つての野宿になる。盗賊や狼や野犬に怯え、雨や風や寒さに苦しめられ、慣れない馬に揺られて旅をしなければならぬのなら、経験豊富で強そうな用心棒を雇うのが普通感覚というものではないだろうか。

「君も私と同じかもって思ったから」

オルリコはゆっくりと目を泳がせ、言葉を選ぶように答えた。

「君も私と同じ、つまらない仕事ばかりしてる人だと思ったから、私の仕事のこと、分かってくれると思ったんだ」

確かに、絶影の畑の番や花嫁の護衛は、オルリコのおつかいや石拾いに似ている。用心棒らしからぬつまらない仕事ばかりしている絶影に彼女が親近感のようなものを抱いてもおかしくはないのかもしれない。だが。

「それだけ？それだけの理由で自分の命や安全を俺なんかに預けちゃうのか？途中で後悔しない？」

絶影が疑り深く訊ねると、思いがけずオルリコが微笑んだ。目じりが下がり、唇の間から綺麗な白い歯が見えた。

「だって、私は信じてるよ。本当は君が強いつてこと。世間の噂や評判なんて当てにならないもん。赤兎さんが太鼓判を押すんだから、君はきつと、すごく強い」

絶影は自分の頭に血が上るのを感じた。こんなことを言われたのは用心棒になってから初めてのことだった。いや、生まれて初めてかもしれない。絶影は天高く舞い上がる気持ちを抑え、お礼の言葉をあたふたと考えたが、それを口にする前にオルリコが思いついたように付け足した。

「あつ、あと、君が一番安いつて聞いたから」

オルリコは楽しそうににっこりと笑ったが、絶影は両手で頭を抱えて踵を返した。

「……おやすみ」

いつものことだからと言って、心が痛まないなんてことはない。予想していた展開だからと言って、予定通りの行動を取れるとは限らない。それならいつそ、いつもと何もかも違うことや全く予想外のことに思い切り振り回された方がいい。

「——信じてるよ、か」

衛世館に帰る道すがら、彼は何度も何度もその言葉を思い出した。きつと一生、忘れない言葉だろうなとしみじみと思いながら、何度も、何度も思い出した。細長い雲が幾筋も浮かぶ真つ赤な西の空を眺め、足の裏から力が湧き上がるのを感じ、人生で初めて自分が手にした仕事を誇らしく思った。

きつとあの子を、護ってみせる。

2・それが仕事／青海草原

「隣町まで飴玉一個買いに行かされたり、的頭村に石ころ拾いに行かされてるってマジ？」

小柄な用心棒の遠慮のない言葉を思い出し、オルリコはため息をついて自室の扉を開けた。薄暗い室内を手さぐりで歩き、卓上に油の入った小皿を置いて、小さな明かりをつける。そこは狭くて底冷えのする屋根裏部屋だったが、この世でたった一つの彼女の安息の空間だった。

屋根裏部屋には小さな寝台を囲むように壁際に本棚が三基も並んでいる。張からもらった給金はほとんど本に費やされていた。仕事の時間以外のほとんどを彼女はここで本を読んで過ごしている。特別な用事がなければ外出はしない方だ。

「世間の噂と本当のことは違うよ」

あの時、オルリコはとっさに言い返したが、絶影の言ったことは本当のことだった。彼女は主人である貿易商人の張から、彼の娘たちの身の回りの世話を任されている。金華と銀河という双子の姉妹は本当に丸一日かけて石ころを拾いに行かせたり、花を摘みに行かせたりするのだ。

「でも、それが私の仕事だもの。それが私の、生きて行くための手立て」

一年前、オルリコは商人だった両親を流行病で亡くした。両親が元遊牧民だったため付き合いのある親戚は暁都におらず、ひとりぼっちになった彼女を引き取ってくれたのは父の商人仲間の張だった。この屋敷を追い出されたら彼女には行くところなどない。双子の我儘に付き合うことはオルリコが生きて行くために必要なことだった。

「オルリコ！」

「オルリコ！」

突然扉の向こうから甲高い声がして、オルリコは飛び上がって驚

いた。金華と銀河だ。彼女たちはどんどんやかましく扉を叩いた。
「オルリコ、西瓜すいか！ねえ西瓜切って！」

慌てて扉を開けると、双子の姉妹は張り付けたような満面の笑みを浮かべて小ぶりの西瓜を差し出した。大きさの割にずしりと重い西瓜を受け取り、オルリコは双子と共に階段を下りて厨房へ向かった。

「明日は金華さんと銀河さんが起きる前に出かけますね」

双子が「やっぱり行かなくていいよ」と言ってくれないものかと淡い期待を抱きつつ、オルリコは西瓜を調理台に置いた。だが、十歳の姉妹は西瓜西瓜西瓜と叫びながら包丁を握るオルリコの周りを走り回るばかりで、シャナドゥー行きの撤回などしてくれそうにない。

「二週間、いい子にしていして下さいね」

金華と銀河はオルリコが切り分けた西瓜に群がり、にこにここと機嫌良く西瓜を頬張った。

「うん、いつてらっしゃい！ちゃんと取って来てよね！」

「金華のと、銀河の、どっちも取って来るんだよ！待ってるからね！」

双子は昨年、父親と一緒にシャナドゥーへ旅をしている。その時、彼らに同行した用心棒が赤兎と彼の五人の部下たちだった。オルリコは留守番をしていたので話に聞いたまでだが、赤兎たちのおかげでそれは楽しく安全で快適な旅だったという。そのせいか、この子供たちは旅が危険なものであるとは思っていないようなのだ。つまらない用事のために、評判の悪い格安の用心棒と二人きりでシャナドゥーへ行かなければならないオルリコの気持ちなど彼らには絶対に分かるまい。

「えい！」

考え事をしていたオルリコの顔に冷たいものが押し付けられる。銀河が背伸びして、オルリコの顔を目掛けて西瓜の皮を振り回したのだった。

「きゃあ！ぎ、銀河さん！」

抗議の声は子供たちを喜ばせるばかりだった。今度は金華が西瓜の皮を投げる。オルリコは避ける暇もなく、皮は頭の天辺で結った彼女のお団子髪に直撃した。間もなく双子の西瓜の皮投げ合戦が始まり、彼女は戦火をくぐりぬけて部屋の隅まで避難した。

「オルリコ、逃げちゃだめだよ、あたしの味方になって戦って！」
「だめだよ、オルリコはあたしの味方だもん！」

厨房に西瓜の皮が飛び交う。鍋が床に転がり、中に入っていた夕食の残りが散乱する。小さな花瓶が倒れ、オルリコの摘んできた花が金華に踏みつけられる。

「もうやめて！やめて下さい！」

オルリコの必死の願いは叶わない。

「何事ですか、これは！」

騒ぎを聞きつけた老使用人がしかめ面を覗かせた途端、双子は西瓜の皮投げをぴたりとやめた。厨房の床に夕食の残りや西瓜の皮が散らばり、壁やオルリコが西瓜の汁だらけになっているのを目にためて、老使用人はさらに眉をひそめた。

「お嬢様方、もうお休みの時間ですよ。オルリコ、早くここを片付けなさい」

「はい」

「はい」

老使用人に連れられて双子が厨房を出て行くと、残されたオルリコは包丁を双子の手の届かない棚の上に置き、西瓜の皮投げ合戦の後片付けを始めた。床や壁を拭き、花瓶を起こし、鍋を洗う。気が付くと視界がにじんで、涙が溢れそうになっていた。

オルリコは雑巾を放り出し、階段を駆け上って屋根裏部屋に飛び込んだ。勢いよく扉を閉めた瞬間、両目から涙がこぼれ落ちた。旅に出るのが怖い。何もかも不安で仕方ない。彼女は片道半日の的頭村に行く以外で暁都を出たことがないのだ。だが何より、双子の我がまままで旅に出ざるを得ない自分自身が惨めに思えて仕方がなかつ

た。

オルリコはふと思い出して懐から絶影の仕事の履歴書を取り出した。

「的頭村へ村人の護衛——所要半日。官吏の娘の嫁入りを護衛——三本先の通りまで。的頭村の畑の番——二カ月」

彼女はくすくすと笑った。これを見た時、この人なら、生きて行くためにつまらない仕事をしなければならないオルリコの気持ちを分かってくれると思った。この人も、生きて行くためにオルリコのつまらない仕事に付き合ってくれると思った。

「もう少し、あと二十日の辛抱だもの」

オルリコは着物の袖で涙をぬぐい、顔を上げた。

そう、あと二十日でこんな暮らしも終わる。彼女は二十日後に結婚式を挙げて、立派な嫁入り道具と本棚と共に張の商人仲間に嫁ぐのだ。この旅は双子の我儘に応える最後の大仕事だった。

オルリコは厨房に戻り、手早く後片付けを済ませた。屋敷の中がしんと静まり返っているところを見ると、双子や使用人は眠ったようだ。主人である張は商用で当分帰らない。彼女は誰にもおやすみを言わずに屋根裏へ帰り、頑丈な帆布の袋に荷物を詰め込み始めた。

翌朝、開門時間ちょうどに青龍門にたどりつくと、馬を二頭引いた絶影がオルリコを待っていた。小柄で柔らかな顔立ちの彼はやはりどう見ても用心棒には見えず、護衛というよりお供という雰囲気だった。

「おはよう」

オルリコが声をかけると彼は日焼けした顔をほころばせた。

「おう、おはよう！忘れ物ないか？」

絶影は背中に弓と矢筒を背負い、腰には剣を帯びていた。二人と

もデールと呼ばれる皮製の膝下文の上着を着ていて、彼は青色、オルリコのは紫の地に黄緑色の模様が入っている。防寒に優れているデールの下に着ているのは長袖の貫頭衣とズボンだけで、足元は乗馬に適した長靴だ。

「たぶんね。それより、この馬、私ひとりで乗るの？君と一緒に乗るんだと思ってた」

オルリコは二頭の馬に近づいて愛らしい長い顔をじっと見つめた。馬たちは手綱を持つ絶影の傍らに大人しく立ち、瞬きを繰り返している。

「そりゃ、君や俺くらいの体重なら一緒に乗れるけど、別々に乗った方が馬の負担が少ないし、何かあった時に俺が自由に動けた方がいいと思って」

平然と言いながら絶影はオルリコに手綱を渡した。

「大丈夫、簡単だよ。手貸すからさっさと乗っちゃおう、よいしょ」
「え？え？」

躊躇うオルリコに構わず、絶影は彼女の左足を持ち上げてあぶみ蹬にかかせた。目いっぱい足を上げさせられたオルリコはよろけそうになり思わず馬の背の鞍をつかんだ。

「そうそう、鞍をつかんだら勢いつけて一気に跨いで、お尻は絶対蹴るなよ。あぶみ蹬に右足入れた？じゃあそつと座って」

気が付くとオルリコは馬に跨っていた。

「た、高いよ……私きつと落ちる……」

「すぐ慣れるって。うん、地面に立ってる時よりかつこいいよ」

絶影は馬に乗った彼女を見上げて満足げに笑った。オルリコは少しだけ誇らしい気持ちになって背筋を伸ばす。

「お、いい姿勢。手綱は右手で、もう少し短く持って。左手はたてがみ鬣つかんで、そしたら怖くないから」

言いながら絶影はオルリコの脚の長さにあぶみ蹬を調整して、素早く自分の馬に跨った。彼の馬は薄い小麦色で、オルリコの馬はつややかな漆黒だ。絶影は手綱を緩め、軽く馬の脇腹を蹴って、開き始めた

青龍門に向かつてゆつくりゆつくり歩き始めた。オルリコの馬は彼女がおろおろしている間に絶影の馬のお尻を勝手に追いかける。
「わ、わ、わあああ」

右に、左に、揺れる。脚で馬の身体をはさみ、必死にバランスを取る。鬣たてがみの束をつかみ、踵に力を入れて踏ん張らなければ落ちてしまいそうだ。

「な、簡単だろ？」

全身全霊をかけて揺れる鞍に座っているオルリコを、絶影はこやかに振り向いた。

「全っ然っ、簡単じゃないよ！」

「あっはっはっは」

青龍門をくぐり、彼らは暁都の外に出た。薄暗い草原の中を貫く街道に沿って馬を進めるうちに、前方の地平線の向こうから眩い火の玉がせり上がって来た。朝が来たのだ。

「すっごい」

ようやく馬の歩くりズムに慣れてきたオルリコは遙か草原の彼方から昇る朝日に心を打たれた。温かく白い光に照らされ、夏らしい爽やかな草原の風に吹かれ、まるで新しく生まれ変わったような気分になる。

「私、的頭村に行く以外で暁都の外に出るの、これが初めてなんだ」
オルリコの前を歩く絶影が馬上で彼女を振り向く。

「へえ、そんな生活想像できないな。俺は元々遊牧民だから時々こうして草原で馬に乗らなきゃ死んじゃうよ」

そう言うとき絶影は馬の脇腹を蹴って加速し、道からはずれてオルリコの周りを大きくぐるりと駆けまわった。さっきまでつまらなそうに歩いていた馬が鬣たてがみや尻尾をなびかせて生き生きと走る様は何とも美しく心が惹かれた。

『地面に立ってる時よりかっこいいよ』

絶影はそう言ってオルリコを褒めてくれたが、その称賛は彼にこそふさわしい気がした。馬上の彼はまるで別人のようで、柔和で優

しい表情は引き締まり、どこか余裕のあつた穏やかな目は鋭くなり、小柄だと思つていた身体さえ一回り大きく、たくましく見える。何より、馬の上の彼は籠かごから解き放たれた鳥のように自由だった。

「私の両親も遊牧民だったんだよ。暁都で一旗揚げようと思つて集落を離れてしまつたけど」

オルリコは彼女の隣に馬を並べる絶影に言つた。彼は上機嫌に笑つた。

「じゃあ、すぐにうまくなるよ。君の身体を流れる血が、馬や草原をきつと覚えてる」

私の身体を流れる血。オルリコは手綱を持つた自分の掌に視線を落とした。亡き父や母もこうして馬で草原を歩んだことがあつたのだろつ。目の前に広がる大草原を、何十人、何百人、何千人の祖先たちが馬と共に渡つてきた。今、自分が彼らと同じ道を同じ手段でたどつていると思うと感慨深いものがあつた。

「おおい、おまえら、どこ行くんだ？」

横合いから声がして二人は丘を越えてやつてくる馬に目をやつた。乗っているのは商人風の中年男だ。大きな荷物を背負い、旅装はずいぶんくたびれていたが、髪や口髭を丁寧に整えているので真人間に見える。

「晋粥しんしやくだよ」

商人風の男が彼らの目の前で急停止すると絶影は答えた。晋粥は今夜の宿だ。暁都の周辺で最も栄えている宿場町で、都並みの流通がありながら物価は都以下なので、オルリコは足りないものを晋粥で買い足そうと思つていた。だが、商人風の男は顔をしかめて首を横に振つた。

「それならあっちへ行つた方がいい。この先の橋が大雨で流されちまつてるんだ。水かさが増してるから馬ではとても渡れないらしいよ」

絶影は男の話にうなずき、ちらりとオルリコを見て自分の手袋を脱いだ。

「君、手袋したほうがいいよ。手綱がこすれて痛いだろ」

「え、うん、ありがとう」

オルリコは絶影の体温の残る皮の手袋を遠慮なく受け取り手を入れた。ちょうど手綱をつかんだ掌の摩擦が気になり始めていたのだ。「橋が壊れてるんじゃないや仕方ないよな、遠回りしよう。——ご親切に、どうもありがとう」

「なあに」

商人風の男と別れ、二人は街道を逸れて起伏の激しい草原を進み始めた。ところどころに動物の巣穴や岩や自然にできた段差や亀裂があり、絶影の導きでそれをよけながらしばらく黙って歩いた。

「なあ、俺が本当は強いってこと、君は信じてくれてるんだよな。それって、何で？」

不自然に沈黙を破ったのは絶影だった。オルリコは少しだけ考えてから隣を歩く彼に答える。

「だって、衛世館の用心棒はみんな一流だって張さんが言ってたし、赤兎さんが張さんの家の使用人である私に変な用心棒を勧めるとは思えないし」

「それだけ？」

それだけということもないのだが、自分が感じているぼんやりとした気持ちを言葉にするのが彼女には難しく思えた。絶影がっかりしたようにうなだれたので、彼女は仕方なく思考を巡らせながら口を開く。

「君、人に馬鹿にされてもあんまり怒らないでしょ。仕事がなくても本気で焦ってない。本当に弱い人ならそんなに余裕でいられないんじゃないかって」

それはどこか立場が似ているオルリコと絶影の決定的な違いだ。世間の評判通り無力なオルリコは、本当は強い彼のように堂々と構えていられない。自虐的な気分になり、オルリコは話題を変えた。「そつえば参考までに聞くけど、君、仕事するの何日ぶり？」

絶影は首をひねり、指を折りながら思い出すように瞳をぐるりと

動かした。

「えっと……三ヶ月ぶり？」

「三ヶ月?!三ヶ月も仕事しないで何やってたの?!」

「何って昼寝したり、飲みに行ったり、麻雀したり、あ時々馬に乗って訓練して……そんな顔すんなよ、しょうがないだろ、仕事なかったんだから」

大物と言うべきか、怠け者と言うべきか。休日などなく毎日毎日金華と銀河の世話に追われている彼女には考えられない生活だ。羨ましい。

「……君のことさつきまでは信じてたけど、今は疑わしい」

当てつけに言ってみせると、絶影は苦虫を噛み潰したような顔で舌打ちした。

「ちっ、んじゃ張りきらないとな!——下がって!」

「え?」

小高い丘を越えたところで、彼は手綱を引き、自分の馬とオルリコの馬を止めた。四つの砂埃すなぼこりが視界に入り、疾走する馬の蹄の音が聞こえたのはその時だった。四方から馬に乗った小汚い男たちが駆けて来る。全員が片手に大振りの剣を握っている。賊だ。

「手綱、もっと短く、鬣たてがみのところで持つて。脚に力入れて、膝を柔らかく、踵下げて、足の裏で鎧あぶみをつかまえるような感じで」

オルリコに指示を与えながら絶影は鋭い目つきで不敵に笑い、ぐるりと馬を方向転換させて牽制するように賊の顔を見回した。その中の一人に、先刻、大雨で橋が落ちたと言って彼らに遠回りを勧めた商人風の男の姿があった。

「な、言つたる?可愛い娘を連れてるつてよ」

「ああ、こりや高く売れるな」

「売り飛ばす前に俺たちもたっぷり楽しませてもらおうぜ」

品のない笑い声を響かせ四人は彼らを取り囲んだ。絶影は動じることなくオルリコに馬を寄せ、低い声で囁いた。

「絶対に手綱を離すな。絶対に落馬するな。馬のリズムに合わせて

どこまでも走れ。そしたら俺が絶対に護ってやる」

言うなり、絶影はオルリコの馬の脇腹を思い切り蹴飛ばした。驚いた馬は前足を上げ、恐怖に凍りついたオルリコを乗せて走りだす。視界の隅で弓を構える絶影が見えた。

「きやあ！」

疾走する馬の背の上で身体が毬のように大きく上下に跳ね、お尻が鞍から持ち上がったのは打ちつけられる。跳ね上がる勢いで上半身が前方につんのめり、頭から地面に落ちそうになる。とろとろ歩いていた時とは何もかも違っていた。経験したことのない速度で大地を駆け、あつという間に景色が通り過ぎる。風がぼうぼうと耳を打ち、砂埃が舞い上がる。

オルリコは歯を食いしばり、前のめりになる身体を必死で起こした。振動に耐えようとするのをやめ、腰を浮かせて鎧にかけた足で体重を支える。馬のリズムに合わせて自ら身体を動かすと、馬の走り方が軽やかになったような気がした。

絶対に手綱を離さない。絶対に落馬しない。絶影が助けにくるまで走ってみせる。

それが私の仕事だ。

「おいおい大丈夫かよ、お嬢ちゃん」

オルリコの後方で賊の一人が獲物をいたぶるように言った。視線を向ける余裕はないが、蹄の音で二人の追手がすぐそこまで迫っていることが分かった。

「げへへへ、本当に可愛いなあ！怪我しないうちに止まった方がいいんじゃないかねえかあ？」

男が下品な笑い声とともにオルリコの馬に馬を寄せ、からかうように軽く剣先をオルリコに向けた。反対側にもう一人が接近してくる。彼女の左右を挟んだ彼らは武器を振りかざすでもなく、どう見ても乗馬に慣れない彼女が音を上げるか落馬するのを面白そうに待っている。

「もつと速く！行け！行け！」

オルリコは地平線を睨み、見よう見まねで馬の脇腹を蹴った。己の身体を流れる祖先の血に祈りながら。

3・声が聞こえた／晋粥

オルリコが悲鳴を上げながら走り去り、二人の賊が彼女を追って行くと、絶影はすぐに弓を引いた。至近距離で胸に矢を受けた一人の賊は呻き声も漏らさず剣を手放して落馬した。彼の目にもとまらぬ弓技に、残された賊は剣を構えたまま後ずさりした。絶影とオルリコに橋が落ちたから遠回りしろと勧めた商人風の男だ。

「お、おまえ、信じてなかったんだろ？大雨で橋が落ちたなんて。なんで騙されたふりなんかした？」

絶影は背中の矢筒から新しい弓を取り出し、慣れた手つきで弓を引いた。男を傷つけることに、爪の先ほどの躊躇いも感じなかった。矢を放つ。男は剣を振り回して矢を払おうとしたが、矢は男の太股に命中した。

「あんたこそ、俺が武器持つてるの覚えてたろ？四人で襲えばどうにかなると思ってた？」

男が地面に倒れると、彼はすぐにオルリコを追った。ついでに、聞こえているか分からないが男を振り返り、気まぐれで教えてやる。「騙されてやったのは、あの子にいいところ見せたかったからだ！」

オルリコと二人の賊は砂埃すなほこを上げながら草原を疾走していた。絶影は馬の脇腹を蹴り、手綱を引いたり緩めたりを繰り返して速度を上げた。

『絶影』

それは三国志に出て来る馬の名前で、影も残さぬ速さで走り去ると称賛された魏の曹操の愛馬だ。赤兎が何故そんな名前を彼に与えたのか、彼には分からない。だが、彼の敏捷性はその名に恥じないし、馬に乗れば影も残さぬ速さで駆けることができる。

「いいところ見せてやろうぜ、曹操！」

絶影は愛馬に語りかけ、高速での疾走を続けながら馬上で弓を引いた。膝でしっかりと馬の身体を挟んでいるから落ちることはない。

揺れる鞍の上で狙いを定めるのは至難の業だが、長年連れ添った愛馬の刻むリズムは彼の身体に馴染んでいた。

「ぐああっ!!」

にやにやと笑いながらオルリコに剣先を向けていた男が肩に矢を受け、叫び声を上げて馬から転がり落ちた。砂埃が舞い、驚いた馬はあさつての方向へ逃げて行く。

「おい、相棒！てめえ！」

最後の一人は追いついた絶影に剣を突き出した。絶影は弓を背負って腰の剣を抜き、片手で手綱をさばきながら応戦する。彼は気分が高揚するのを感じた。

「どう?!俺が強いつて信じた?!」

賊の振り回す剣を弾き飛ばし、彼はオルリコへ得意げに笑って見せたが、彼女は馬を走らせることに集中しているようで彼のことなど見ていない。彼は舌打ちして丸腰になった賊が逃げて行くのを見送った。

「もういいよ、めいっばい手綱引いて止まって!」

オルリコは言われたとおり両手で力いっぱい手綱を引き、馬が止まるとがつくりとうなだれた。彼が覗きこむと、彼女の顔は青冷め、肩や唇が震えていた。

「も、もしかして、結構怖かった?」

おそろおそろ訊ねるとオルリコは目を吊り上げて怒鳴った。

「当たり前じゃん!怖かったなんてもんじゃないよ!」

大人しそうなオルリコの思わぬ怒声に絶影は飛び上がるほど驚いた。

「死ぬかと思ったんだよ!」

砂埃で汚れたオルリコの頬にぼろぼろと透明の涙がこぼれ落ちた。彼女は顔を背けてデールの袖で涙をぬぐい、嗚咽を堪えるように小刻みに震える唇を引き結んだ。

「ご、ごめんな」

俺は物心ついた時には兄貴と馬に乗って走り回っていたから、初

めて馬に乗る人の気持ちとか分からなくて。言い訳ばかり頭に浮かんだが、そんなことを言っても彼女の慰めにならないことは分かっている。とはいえ、この場で泣かれても彼にできることはなかった。「ごめん、もう無理させないから。今日は馬、下りて歩こう」

晋粥には閉門時間までに着けばいい。ここまで晋粥の方角に走らせて来たから、無理な疾走でずいぶん距離を稼げたはずだ。天気もいいし、のんびり街道を歩いて行くのもいいだろう。

ところが、涙をぬぐったオルリコは首を横に振った。出会ったときから印象的な黒い目に、静かな決意の火を灯して。

「うっん、平気。全然平気」

「や、無理すんなよ」

「大丈夫、まだやれる」

死ぬかと思ったと泣いていたのは誰だと彼は言い返しそうとしたが、彼女が小さく言ったのでやめた。

「助けてくれてありがとう」

街道に戻って橋を渡り、その日の午後、二人は無事に晋粥に到着した。町の門をくぐり、馬を下りると、オルリコが市壁に寄りかかってへたり込んだ。ろくに休憩をとらずに来たので当然と言えば当然だ。

「膝、膝が……」

彼女は情けない顔で、馬に乗った姿勢のまま固まった膝を曲げたり伸ばしたりさすったりしている。絶影は二頭の馬を引き連れ、そんな彼女を見下ろした。

「だから途中で休憩しようって、俺何度も言ったよ」

「だって、休憩中にまた賊に襲われたら怖いもん」

「襲われたって返り討ちだよ」

「それでも弱音吐くの嫌」

いたたたたと言いながら、オルリコは齒を食いしばって立ち上がった。おそらく膝だけではなく、お尻や太股も痛いはずなのだが、彼女は自分の馬の手綱を受け取った。

「お待たせ、まず宿を取るんだよね？」

ものすごく痛そうに顔をしかめ、ものすごく痛そうな声で言い、オルリコは絶影を促した。

「……頑固っていうか、意地っ張りっていうか、君って本当に忍耐強いんだね」

「普通だよ」

二人は馬を引き、込み合った大通りを歩いて「天陽酒家」という宿屋の扉をくぐった。宿屋の少年に馬を預け、無人の番台で宿帳に記張していると奥から老婆が顔を出した。老婆は絶影とオルリコをしげしげと見つめ、何かを疑うように目を^{すが}眇めた。

「駆け落ちかい？」

そんなわけあるか。絶影は咳払いした。

「衛世館の用心棒だ、こっちはお客さん」

「おやまあ、あんたみたいなチビツ子が赤兎のこの用心棒かい？世も末だねえ」

あんまりだ。

「で、部屋ある？ないなら他へ行くけど」

「もちろんあるさ、さあおいで、お嬢ちゃん」

老婆はオルリコの手を取って建物の奥へ進み、暗い廊下を経て一つの客室に二人を案内した。中を覗くと狭い部屋に寝台が二つ並んでいて、他には家具らしい家具はない。かろうじて寝台と寝台の間についたてが一枚あるきりだった。

「井戸と厠は裏庭、湯が必要なら自分で取りにおいで」

老婆はそれだけ言うたとさつとその場を立ち去った。絶影はオルリコを部屋に残し、慌てて老婆を追いかけた。

「おいおい婆さん、あの子は客だって言っただろ？部屋別にしてよ」

野宿ならともかく、女の子と同じ部屋で寝るなんてできっこない。第一、オルリコが嫌がるはずだ。何しろ彼らは昨日出会ったばかりなのだから。

「客つてことは、あんたあの子の用心棒なんだろう？同室の方が都合がいいんじゃないのかい？」

施錠した客室で何から彼女を護れと言うのだ。

「あのなあ……」

絶影が抗議の言葉を探していると、背後からオルリコが近づいてくる。

「ねえ、私は平気だよ。その方が安く上がるし」

我慢の鬼がとんでもないことを言い出した。

「ほらごらん。やっぱり女の方が潔いねえ。度胸が据わってるよ」
かっかっかと笑いながら、老婆は廊下の奥へ消えて行った。

「お腹すいちゃった。買い物がてら夕飯食べに行こうよ」

オルリコが暢気に言ったので絶影は諦めて部屋に荷物を置き、買い物のための袋に財布だけ放り込んで背負った。腰に剣を帯び、弓矢は置いて行く。オルリコは財布を懐に入れただけのようだった。

宿を出ると日が随分傾いていた。腹ごしらえの前に市場に行かなければ閉店してしまう。彼らは足早に大通りを歩き、露店の並ぶ横町に向かった。絶影は保存食や薬や矢を調達し、オルリコは乗馬用に頑丈な手袋と鞍に敷くための厚手の布を買った。

買い物を済ませた時には夕暮れ時だった。髪飾り屋や装飾品店の前で足を止めたがるオルリコを引っ張り、絶影は「楽笑飯店」という胡散臭い名前の食堂を目指して歩いていった。その食堂にいる黄という男に、シャナドゥーまで行く隊商を紹介してもらえと赤兎から言われているのだ。晋粥からシャナドゥーまでの六日間は道なき草原を進み、毎晩野宿をしなければならないので絶影とオルリコの二人だけでは危険すぎるのだ。隊商と一緒に行動すればある程度の危険は——今日のような賊くらいは避けられる。

「おうおう、チビッ子が、可愛い子連れてんじゃねえかよ」

隊商での旅に思いをはせていた絶影は酒臭い息を吐きかけられて我に返った。彼に顔を近づけているのは酔っ払った若い男だった。チンピラとも言っ。

「おい見ろよ、こいつ、剣なんてぶら下げてやがる」

「可哀想に、腕つぶしじゃ女を護れないんだろ」

「お嬢ちゃんよ、こんなチビツ子放っておいて、俺たちと一緒に飲もうぜえ」

チンピラは七人いた。どいつもこいつも上等な着物を着て、きちんと髪を整えているのでどこかの金持ちのどら息子たちといった風情だ。オルリコは戸惑ったように眉根を寄せて、猫なで声を出しながら近づいてくる彼らと絶影を交互に見た。

「俺んち、この先の寿春酒家つてとこなんだ、なあ来いよ、なあ」

チンピラの一人にオルリコが腕をつかまれ、無理やり連れて行かれそうになる。

「手え離せ。あんたらも揉め事は避けたいだろ？」

絶影は怒りを押し殺して低く言った。

「あん？何か言ったか？顔の位置が低すぎて聞こえねえな」

げらげらと笑い転げるチンピラたちの後ろでオルリコが目を吊り上げたのが見えた。

「もう、離してよ！君、こんな奴らさつさとやつちやいなよ！」

オルリコはチンピラの腕の中でもがきながら絶影を怒鳴りつける。そんなことを言われても、たかがチンピラ相手に街中で剣や拳を振り回すのは衛世館の用心棒としていかなものか。

「よし！じゃあ、相撲で勝負つけようぜ」

名案が浮かんだとばかりに彼が提案するとチンピラたちは呆れ果てたような顔で応じた。

「はあ？」

「相撲だよ、相撲。俺があんたら全員を倒したらその子を返せ。そのかわり、俺が誰か一人にでも負けたらその子を連れて行っていく」
チンピラたちは勝負の条件を飲み込むと大笑いした。身長でも体

格でも彼が不利なのは一目瞭然だった。見た目が弱そうなのはおまえの最大の武器だと赤兎に言われたことを思い出し、絶影は不本意ながらなるほどと納得した。

「乗った！勝負しようぜ！」

「お嬢ちゃんも気の毒になあ」

「チビの上、馬鹿だとは思わなかったぜ」

大通りにはいつの間にか彼らを囲むように人だかりができて、野次馬の一人の壮年の男が行司役を買って出たので彼に任せることにした。集まった人々の囁き声に耳を傾けると、チンピラ同様に絶影をけなす声が圧倒的多数だった。絶影は腰の剣をベルトから外し、膝下丈のデールを脱いでどちらもオルリコに預けた。

「後で泣きごと言っても聞かねえからな」

初戦の相手はチンピラのリーダー格の男だった。彼も上着を脱ぎ、仲間に放る。一気に勝負を決める気なのだろう。絶影とリーダー格の男は静かに向き合い礼をした。

まずは互いに睨みあい、隙あらば相手の服をつかもつと両手を前に出して構える。どちらが先にしかけるか、絶影は様子を見ながら敵を観察した。男の身長は絶影より頭二つ分高く、胴回りも彼の倍はある。手が大きく腕力もありそうだ。たが下半身は鍛えられていない。乗馬で全身を鍛え、敏捷性を養ってきた絶影の敵ではない。

「チビッ子がんばれ！」

「寿春酒家のどら息子なんて潰しちまいな！」

睨み合う二人を見守るうちに絶影に同情してしまった野次馬がいたらしい。年配の女性からの声援にリーダー格の男は嘲るように笑った。

「こういう時、婆さんどもは負けそうな方を応援するんだよな」

絶影は顎を突き出して男を睨んだ。

「無駄口叩いてる暇があつたらさっさと負かしてみろよ」

挑発に乗り、とうとう男が足を前に踏み出した。男は絶影の脇に手を入れようとしたが彼はそれをひよいと避けた。男は空をつかみ、

齒噛みしてさらに絶影につかみかかるが再びかわされた。まるで背中に羽根があるかのように身軽に飛びのき、絶影は宙返りまで披露する。

「こいつ、ちょこまかと……！」

男は逆上して顔を真っ赤に染めている。組み合わせ勝てると思っているのだろう、がむしゃらに絶影を追いかけまわし、その度にひらりひらりと逃げられた。それを何度か繰り返し、男の足元がふらついた時、絶影は素早く彼に近づきさつと足払いをかけた。

どさりと男が地面に尻もちを着いた。

わああつと歓声が上がった。

「すごいぞ、チビツ子！」

「よくやった、チビツ子！！」

無様に転がった敵を見下ろし、絶影はにやりと笑った。かなり気持ちいい、だけにチビツ子はよせ。

逃げてばかりいるなという観客の注文で次の相手とは最初から組み合わせ技をかけて倒した。三人目と四人目の相手は太り過ぎていたので組み合わせは避け、足払いをかけた後背後に回って引きずり倒したりした。五人目以降は体格差があまりなかったので全員と組み合わせで投げ飛ばした。

七人のチンピラを倒した絶影は人々から称賛を浴びた。英雄にもなった気分とはこのことかと彼は胸を張ってチンピラたちを嘲った。

「俺は暁都の衛世館の用心棒、絶影だ！おまえら顔洗って出直しな！」

彼が正体を明かすと野次馬がざわめいた。

「暁都の衛世館？」

「赤兎のこの用心棒だよ」

「どうりで」

しめしめ、これで仕事が増えたら儲けもんだ。邪なことを考えている絶影の下に笑顔のオルリコが駆けてきて彼の手を両手で握った。

「やっぱり君はすごいよ！」

「え」

絶影の頭にみるみる血が昇っていく。

「いや、その、あの、い、行こうぜ！」

絶影は彼女から剣とデールと荷物をひったくり、人垣を抜け、楽笑飯店へ向かって大通りを歩き出す。オルリコが小走りについてくるのを足音で確かめながら、彼は地面を睨んで黙々と歩いた。彼女からの称賛は嬉しくも照れくさかった。

楽笑飯店は大通りから少しはずれた細い道にあった。大きいが古めかしい店構えをしばし見上げ、二人はその大衆料理店の扉を開けた。

「いらつしゃい！」

「黄つて男がここにいて聞いたんだけど」

応対に出た明朗な娘に訊ねると彼女は白い歯を見せて笑い、満席に近い店の奥を指差した。

「黄じいならそこよ。一番奥が指定席なの」

給仕の娘が指したのは頭が禿げ上がった仙人のような老人だった。絶影はオルリコと顔を見合わせ、黄老に近づいた。

「黄じいさん？ここいいか？」

声をかけると黄老は酒の入った湯のみを手にしたまま静かに目を上げた。

「……誰だ？」

「衛世館の用心棒だ」

絶影は承諾を待たずに黄老の向かい側に腰を下した。オルリコもその隣にちょこんと座る。黄老は二人を見比べ、それから口と唇の端を釣り上げた。

「ああ、寿春酒家のどら息子を相撲で負かしたんだろ。絶影とか言ったか？」

「……耳が早いんだな」

赤兎は、黄老は情報通だと言っていた。

「俺たちシャナドゥーへ行きたいんだ。草原を渡る隊商を探してる」
「隊商は当分出ねえよ」

「それは赤兎も言ってた。ちょうどこの前、シャナドゥーへ行く隊商が曉都を出発したばかりで、次の隊商が出るのは来月だってな。でもあんたならきつといい情報を持っているから知恵を貸してもらえって言われて来たんだ」

黄老の助けがなければ旅は頓挫する。絶影は祈るような思いで老人の顔をじっと見つめた。隣のオルリコも不安そうな表情だった。黄老はふつとため息をついて朗らかに笑った。

「赤兎の頼みじゃ仕方ねえか。いつもは情報料を取るんだが、あのどら息子を負かしてくれた礼をしなけりやな」

とん、と湯のみを食卓に置き、黄老は身を乗り出して絶影に顔を近づけた。

「この前曉都を出たばかりの隊商が盗賊に襲われて青海草原から晋粥に逃げて来ている。幸い全員無事で商品も無傷というから、態勢を立て直したらすぐに再出発すらしい」

はつと目を見張った絶影を見て、老人は楽しそうに目を細めた。

「行き先はシャナドゥーだ。盗賊に襲われたばかりの彼らは腕利きの用心棒が隊商に加わると聞いたらさぞ喜ぶだろうなあ」

絶影とオルリコは嬉々として顔を見合わせた。

「やったね！」

「ありがとう、黄じいさん！」

二人が立ち上がると黄老は酒の入った湯のみに口をつけて手を振った。

「隊商宿は東門の近くだ、行けば分かる」

彼らは楽笑飯店を出て東門を目指した。町にはすっかり夜の帳が下り、店先の提灯の明かりを頼りに歩いて行くと、黄老の言った通り隊商宿は東門のすぐ近くにあった。一目でそれと分かるほど巨大な石造りの建物はまるで要塞のようだ。絶影は入り口の脇で煙草をふかしていた商人風の男をつかまえた。

「俺は衛世館の用心棒だ。シャナドゥー行きの隊商長に会いたい」
「用心棒？へえ、あんたみたいな子供が？」

男は疑わしそうに首をかしげつつ二人を隊商宿の中に招き入れ、
隊商長のもとへ案内してくれた。二人は隊商長と顔を合わせるなり
驚いてのけぞった。それは先刻の相撲勝負で行司役を買って出た野
次馬だった。彼は赤兎と同じ四十代くらいで、さっぱりとした短い
髪に商人らしい人好きのする顔立ちをしている。

「あんた、さっきの！」

絶影が声を上げると、隊商長もおかしそうに笑った。

「おお、君は！いやあ、あの勝負は実にももしろかったよ、絶影君、
はっはっはっは！」

隊商長に肩を叩かれ、絶影は照れながら話を進める。

「俺たちシャナドゥーへ行きたいんだ。隊商に加えてもらえないか
？」

隊商長は即答した。

「もちろんさ！何しろ私たちの隊は一昨日盗賊団に襲われたばかり
でね。君のような強い用心棒がいれば心強いよ」

すげえ。初めて言われた。

「出発はいつですか？」

あまりの感動に呆然とする絶影に代わってオルリコが訊ねる。彼
女の口調に焦りのようなものを感じて彼は我に返って訝しんだ。急
ぐ旅とは聞いていない。

「明後日の朝だ。開門時間にこの東門で会おう。ところでつかぬこ
とを聞くが君たち……まさか駆け落ちじゃないだろうね？」

なんだ。

隊商長と別れて隊商宿を後にすると、空腹の二人は大通りの目に

ついた飯店に入り、遅い夕飯を取った。朝食を食べてから水以外口にしていなかった彼らは炒飯や肉野菜炒めを無言で腹に詰め込んだ。「そう言えば返すの忘れてた。これがなかったら落馬してたよ、ありがとう」

食卓の皿が空になり一段落するとオルリコが口を開き、絶影が貸した皮の手袋を差し出した。彼は牛乳茶を飲みつつ無言でそれを受け取る。

「君、私たちに声をかけてきた商人風の人が悪者だって知ってたでしょう?」

凶星を差され、絶影は咳きこんだ。

「やつぱり。でなきゃあんなにタイミングよく手袋貸してくれないもんね」

理由を聞かれたらどう答えようかと彼が知恵を総動員させていると、オルリコは釣り上げていた目を伏せて頬杖をついた。

「君って本当に強いんだね」

オルリコの表情はなぜか悲しげで、絶影はどう答えたらいいか分からなかった。

「もちろん、強いんだろうなとは思ってたけどね」

「俺が強いと、まずい?」

恐る恐る訊ねると彼女は首を横に振った。

「うつん、そうじゃない、違うよ。あのね、今まで君と私は似ているような気がしてたの。私は裕福な商家の娘さんにつまらない仕事をもらって生きてる使用人。君は見た目で侮られてつまらない仕事しか貰えない用心棒」

言われてみれば似ているかもしれない。

「だけど、私たちは似ているようで正反対だつてことに気がついちゃったの。私は力も才能もないからつまらない仕事をしているけど、君はそうじゃない。君は有能なのにつまらない仕事しか与えられない。君は才能を秘めた逸材なのにな」

皮肉っぽく微笑み、オルリコは牛乳茶の入った湯のみを傾けた。

「君だつて才能あると思うよ。忍耐強さとか、度胸とかさ」

庇うように言つた絶影にオルリコは疑わしげな苦笑を返した。聞く耳持たない様子だ。頑固者め。彼は話題を変えることにした。

「君の両親って遊牧民だつたんだよね。まだ元気なの？」

彼女が遊牧民の血を引いていると聞いてから絶影は彼女に親近感を抱いていた。

「一年前、流行病で亡くなつたよ。それで私は父さんの知り合いの張さんのところに行くことになつたの。君の両親は？君も元遊牧民なんだよね？」

「うん。俺は子供の頃に衛世館へ売り払われて暁都に来たんだ。それ以来、家族には会つてないけど多分みんな元気にしてると思う」

絶影が衛世館に買われたのは十二歳の時だつた。その年はイナゴが大量発生し農作物を食い荒らした酷い年だつた。物価が跳ね上がり、税金が増え、拳句に若者が徴兵されて戦争に駆り出され、人々は日々の暮らしに喘いでいた。

そんな時、遊牧民の集落で生まれ育つた絶影は後継者を探し歩いていた赤兎と出会つた。赤兎が絶影を売ってほしいと持ちかけると彼の父親は二つ返事で了承した。そうしなければ口減らしのために兄弟のうちの誰かを夜の草原に捨てに行かなければならないほど家計は切迫していたのだ。そして、捨てられるとすれば、今より小柄で瘦せつぼちだつた絶影が選ばれたはずだ。

そう考えると、赤兎は命の恩人だ。そして、手放したとしてもどこかで生きていてくれればと彼を売り払つた両親にも今なら感謝できるような気がする。

「あの日のことは今でもはっきり覚えてるよ。赤兎が俺を抱き上げて自分の馬に乗せて、ゆっくり俺の家から遠ざかつていくんだ。親父が禁止したのか、家族の誰もゲルから出てこなかった。俺は誰にも見送られず、さよならも言えずに家を去つた」

あれから三年経つたが、その時のことを思うと絶影の胸はまだ痛んだ。もう少し背が高ければ、もう少し骨太であれば、もう少しこし

筋肉質であれば、彼は今もまだ家族と共に遊牧生活を送っていたかもしれない。つくづく自分の容姿に嫌気がさすのは碌な仕事が出来ない時よりも、あの日のことを思い出す時だった。

「俺は赤兎の腕の中で泣いた。赤兎は黙って手綱を握り曉都に向けて馬を歩かせていた。しばらく泣いていると、声が聞こえたんだ」

目を閉じると、涙で滲んだ光景が鮮やかに蘇る。

「母さんだった。母さんが泣きながら、馬に乗せられた俺を追って来てくれたんだ。風が吹きわたる夕暮れ時の小麦色の草原を、母さんがたった一人で、俺を追って走って来るんだ。何度も転びながら、俺の名前を叫びながら」

目を開けると、オルリコが印象的な黒い目で彼を見つめていた。

「母さんの姿はだんだん遠くなつて、やがて見えなくなった。今でも草原にいと、母さんの姿が見えるんじゃないかと思うことがあるんだ。おかしいだろ？」

彼が無理やり笑ってみせると彼女は首を振って否定した。

「うっん」

オルリコが通りかかった給仕の娘を呼びとめて何か注文した。しばらくの後に運ばれて来たのは紹興酒だった。

「飲もう」

彼女は有無を言わず絶影の手に杯を持たせ、そこに手際よく酒を注いだ。

「おいおいおいおい、俺、一応仕事なんだけど」

なみなみと注がれた紹興酒を見下ろし、絶影はオルリコに訴えた。彼女は自分の分の酒を注ぎながらきっぱりと言い放った。

「いい。私が許す。それに、どうせ明日はこの町に待機だし、飲んじゃおう」

彼女が何か言い出したら聞かないことはもう学習している。絶影は杯に顔を近づけて香りを嗅いだ。何とも言えない芳香に胸がときめく。

「それもそうだよな！」

遊牧民の親を持つ彼らは同時に酒に薬指をひたした。目が合つて微笑む。

「天のため、地のため、人のため」

二人は声をそろえて言いながら天井へ向けて酒の雫を飛ばし、床に雫を垂らし、最後に自分の額に濡れた指先を当てる。天の神と地の神、そして己の祖先に捧げる酒だった。絶影は杯を煽り、一気に空にする。喉と胃がかつと熱くなり、少しだけ、涙が出た。

4・その手/隊商

オルリコが泥酔した絶影を支えながら飯店を出たのは夜中だった。彼の意識は朦朧もうろうとしていて、足元はふらついている。遠慮なく彼女に寄り掛かる絶影の身体を引きずるようにオルリコは宿の方角に歩き始める。彼が小柄で良かったと彼女は密かに思った。

「君、お酒弱過ぎだよ」

「……ぜんぜん酔ってなんかねえよ」

絶影が言い張るので彼女は試しに彼から手を離してみた。本人は真つすぐ歩いているつもりのようなのだが、絶影はよろよろと斜めに進んで閉店した商店の扉に頭を強打する。だめだこりゃ。オルリコはため息をついて絶影の腕を自分の首にかけさせた。夜が更け、大通りの人気は少ない。しばらくびくびく歩いていると横合いから声をかけられた。

「待ちな」

オルリコはぎょつとして足を止めた。脇道から現れたのは相撲勝負で絶影に負けた七人のチンピラたちだった。全員、頬や腕に小さな傷を負っている。彼女は立ち止まった途端に眠りこんでしまった絶影を見下ろし、彼に酒を飲ませたことを後悔しながら後ずさりした。

「酔いつぶれてるとは都合がいい」

進み出たのは絶影と最初に戦って負けたリーダー格の男だった。

「さつきはよくもやってくれたな。とんだ恥かかされたぜ。たつぷりお礼をしてやるよ」

「そうとも、おまえらを縛りあげて素っ裸にして市門に飾ってやる！」

相変わらず下品な笑い声を上げ、チンピラ達は同時に絶影とオルリコににじり寄る。チンピラたちを怒らせてしまった以上、どんなに謝ったところでただではすまされないだろう。

絶影を置いて自分だけ逃げるか。

オルリコは短い時間で逡巡した。絶影をこの場に置いて行けば、チンピラたちは嬉々として彼を痛めつけるだろう。その隙にオルリコだけ逃げ切ることができれば。

だが、それでもし彼が殺されてしまったら。そもそも彼に酒を飲ませたのはオルリコなのに。

「お願い、やめて」

声が震えた。オルリコは両足に力を入れて絶影の頭を自分の胸に抱え込んだ。

「私たちをここで痛めつけるより、私たちを無傷でさらって、身代金を要求した方が得じゃないかな？ 私はともかく、彼は暁都の衛世館の用心棒で、その経営者の大のお気に入りなの。だからきつとたつぷり身代金を取れると思うんだ」

オルリコの必死の提案にリーダー格の男は憐れむように笑った。

「悪いな、おれたち金には困ってなんだよ、お嬢ちゃん」

一人がオルリコの肩をつかみ、もう一人が絶影の髪をつかむ。二人が引きはがされたその時、絶影の頭が釣り上げられたようにびくつと上を向いた。

「なんだ、こいつ……うわあっ！」

彼の髪をつかんでいた男が吹き飛んだ。いつの間にか絶影は剣を抜いていた。誰の目にも留らない速さだった。地面に転がった男は血が溢れる腹を抑えて呻き声を上げている。

「オルリコ、壁際に寄って、しゃがんで、目つぶってろ」

彼は馬上では籠から放たれた鳥のように自由だった。相撲勝負の時は背中に羽根が生えているかのように身軽だった。だが、膝を深く曲げ、腰を低く落とし、前屈みになって剣を水平に構える今の姿はまるで——地を這う虎のようだった。

「酔ってる時は手加減できねえ。手元も狂う。俺に近づくな」

彼のものとは思えない殺気のこもった低い声が暗闇に響く。オルリコは言われたとおりにしゃがみこみ、彼がチンピラたちを殺さな

いことを祈った。チンピラたちはすっかり動転して、斬られた男と絶影を見比べた。

「て、てめえ、よくも！」

リーダー格の男が懷から短剣を取り出した。

「俺は言つたぞ、手加減できねえってな」

絶影は低く構えた態勢から一步踏み出し、突き出された短剣をはじいて剣を一閃させた。彼の剣は男が短剣を握っていた右腕を容赦なく切り裂き、返り血が音を立てて地面に散る。大量に流れ落ちる血からオルリコは思わず目を背けた。血の匂いが辺りにたちこめる。

「うあああ！！」

リーダー格の男は腕を抑えて尻もちをつき、他のチンピラたちは今度こそ諸手を上げて逃げ出した。負傷した二人は置いて行かれたことに気が付き、傷口を手で押さえながら慌てて仲間を追いかけた。

「……今の、赤兎には黙ってて」

襲撃者の姿が完全に見えなくなると、剣の血を払いながら絶影がぼそりと言った。

「用心棒は眠っている時でも、酔っている時でも、危険を察知して無意識的に臨戦態勢に入れるよう訓練されてる。でも俺、まだ修行が足りないんだ。実戦経験が少ないって言ったらいいわけだけどさ」

絶影は大通りに戻ろうと踵を返したが、オルリコは足がすくんでしまつて立ち上がることができなかつた。衛世館の用心棒の本当の力を目の当たりにして、彼のことが急に怖くなつた。

「ごめん、怖かつたよな」

彼女の気持ちを感じたのか、絶影が戻つて来てうずくまるオルリコに手を差し伸べた。彼女は彼の手を見つめ、その手が剣を握り、弓を放ち、拳を繰り出して彼女を護ってくれたことを思い出す。

「……うつん、平気。全然平気」

オルリコは絶影の手を取つて立ち上がった。彼の手は温かく、心配そうにオルリコを覗きこんでくる彼の目は馬のように優しくだった。

「また、そうやって。無理すんなよ、我慢の鬼」

我慢の鬼ってなんだろう。オルリコは絶影の手を握ったまま宿に向けて歩き出す。

「助けてくれてありがとう」

オルリコの言葉に絶影は照れたように頭をかいた。

夜空を見上げると満天の星がととてもとても綺麗だった。

二日後、夜明け前に宿を出て、二人は東門の前で隊商に加わった。

「そうそう、忘れてた。私は劉と言ったんだ」

出発準備の合間、馬のいななきに負けない大声で隊商長が二人に自己紹介した。

「お嬢さんのお名前をまだ聞いていなかったな」

「オルリコです。商家の使用人をしています」

絶影の手を借りて馬に乗ったオルリコは隊商長の劉に無理やり微笑んでみせた。本当は体中がひどい筋肉痛で微笑むどころではないのだが、齒を食いしばって愛敬を振りまく。

「こういう旅するのは初めてなので、どうぞよろしくお願いします」

「ああ、よろしく。なあに、心配はいらないよ、オルリコ君。——ところで、絶影君、出資金の話だね」

劉はにつこりと朗らかに笑い、絶影と金のやりとりをした。隊商は共同出資で成り立っている。全員で幾ばくかの金を出し合い、食料や馬の飼料を買ったり、安全のために用心棒を雇ったりするのが普通だ。集まった人々は四十人近く、よく見ると用心棒が数名いるようだ。しかも見るからに屈強そうなの。

劉と絶影の話が付き、いよいよ隊商は出発した。東門を出て道なき草原をゆつくりと進む。しばらくすると馬にまたがった絶影がオ

ルリコに近づいてきた。不満そうな顔だ。

「出資金、二人分しつかり取られたよ。君はともかく、俺は用心棒だから少しは安くしてくれるんじゃないかと期待したんだけど取りつく島もなかった」

「いざという時は役に立って見せるから負けてくれって言わなかったの？」

「言っただけど、それじゃあ二重契約になるからまずいだろってさ」
「二重契約？」

暖かい風が吹き、馬の鬣たてがみを揺らす。東の地平線から昇って来た太陽の光が草原を刺すように照らしていた

「俺は今、君に雇われてるだろ。だから俺は何が何でも君を護る。君を護ることが最優先事項なんだよな。でも、もし劉さんに出資金を負けてもらったら、俺はこの隊商全体にも少なからず責任を負うことになる。つまり、いざという時、俺は君を護ることを最優先にできなくなるかもしれないってことだよ」

「私を護りながら隊商の人たちや荷物を護るのは大変そうだね」

「だろ？だから、君にとっても俺にとっても負けてもらわない方がいいだろうってさ。うまくのせられた感じだけだな」

二人は何とはなしに隊商の先頭を歩く劉に目をやった。劉は彼らの事情を分かった上で絶影から正規の出資金を徴収したのだろうか、それとも単にがめついだけなのか。

「この隊商って何日か前に盗賊に襲われたんだよね」

オルリコは劉から視線をはずして隣の絶影を見た。馬に乗った彼はやはり地上にいる時よりも精悍な顔つきをしている。

「私、怖いな」

暁都を出てからというものの、賊に囲まれたり、町でチンピラに絡まれたり怖い目には遭ってきたが、隊商を襲うような大規模な盗賊に襲われたらと思うと恐怖で身が凍りそうになる。まして、この隊商は数日前に一度盗賊に襲われて晋粥に逃げ帰っているのだ。獲物を逃した盗賊が虎視眈々と次の獲物を狙っているかもしれない。

「大丈夫だって、その時は俺が君を必ず逃がしてあげる。でも、自分で馬は操つれた方がいいよな。ちゃんと教えてなかったから説明するよ。まずは手綱だけど」

絶影は真面目な顔つきで自分の手綱を持ち上げて見せる。

「基本的に馬の鬣たてがみの辺りで短めに持つ。右に曲がりたい時は右にずらす。思いきり曲がりたい場合は右側の手綱だけを空いてる手で引っばって馬の顔を行きたい方向に向ける」

絶影の愛馬・曹操の顔が右側を向き、進路がだんだん右の方へ逸れて行く。

「次は速度調整。今の速度は常歩なみあしっていうんだ」

隊商の馬たちはのんびりと歩いている。

「一段階速くなると速歩はやあし」

絶影は列から離れ、馬をとことこと小走りで走らせた。馬上の彼は小刻みに上下に揺れている。

「次が駆歩かけあしだよ。これは君も一昨日やったよね」

馬の脇腹を蹴り、絶影は手綱を緩めた。馬は大腿で疾走し、絶影は腰を浮かせて鎧あぶみの上に立ち上がり、上下へ弾むような動きをしている。

「こんなもんかな。駆歩かけあしの上には襲歩しゅうほって言う速度があるんだけど、君には無縁だから省略するよ」

「襲歩？」

「そう。超全速力で走ること。人馬一体の境地だよ」

午前中はそんな風に絶影の乗馬講座が続いた。オルリコは少しずつ馬に慣れ、馬を操る方法を頭では理解した。あとは出した命令が馬に伝わるよう根気強く馬と向き合うだけである。

昼の休憩を半刻ほど取り、隊商は再び東を目指して道なき草原を歩き出した。しばらくすると、また絶影がオルリコの様子を見にやってきた。

「もう少し脚を締めて、膝を柔らかくした方がいいよ」

彼は親切に教えてくれているのだろうが、正直、彼女はそれどこ

るではなかった。ゆつくりと歩く馬に揺られているだけで身体中が辛い。まず膝がものすごく痛かった。次に、太股が痛い。お尻が痛いし、背中が痛い、腕が痛い、手の平が痛い、足首が痛い。昨日、絶影を部屋から追い出して湯浴みした時に確認したところ、太股の内側や裏側が青黒い痣だらけになっていた。お尻の皮も剥けそうだった。

衝撃を和らげるために鞍に厚手の布を敷いたが焼け石に水のような起床時や昼の休憩時に身体の筋を伸ばしたりもしたのだが、それも右に同じである。

「マメに休憩を取ってくれるように頼んでくるよ」

苦痛が顔に出てしまったのか、絶影はオルリコにそう言って馬を駆り、先頭を歩く劉の元へ行ってしまった。オルリコは取り残され、絶影の行動を有難いような迷惑なような複雑な気持ちで見送った。マメに休憩をとったせいで行程が遅れば、十七日後の結婚式に間に合わなくなるかもしれない。すでに晋粥で一日無駄にしていたから、これ以上ぐずぐずするのは嫌だった。

「慣れないうちは大変よね」

焦る気持ちを抑え、馬の後頭部を睨んでいたオルリコに横合いから声をかけてきたのは二十代半ばくらいの女だった。

「シャナドゥーへ着くころには嫌でも慣れてるはずよ。今は無理しない方がいいわ」

この隊商に女性がいるとは思わなかった。ぽかんとしているオルリコに彼女は思い出したように笑った。

「ああ、私はイラーナ。女は私とあなただけみたいだから、仲良くしましょうね」

「オルリコです。あなたは一人で旅を？」

見たところ、イラーナという女性は屈強そうには見えない。用心棒も雇わずに一人で旅をするなんて度胸のある人だとオルリコは感心した。だが、イラーナはあっけらかんと笑った。

「ええ。里帰りよ。父が病気でそろそろ危ないって手紙が来たの」

ということはイラーナも先を急いでいるのではないか。だが、彼女の言動には焦りや苛立ちは見えない。悠々と構えた彼女の態度にオルリコは再び感心した。そんな彼女の心を読んだのか、イラーナは優しげに微笑んだ。

「焦ったところでどうにもならないことはあるわ。今は無事にシャナドゥーへ辿りつくことだけを考えてるの」

確かに、何事もなくシャナドゥーへ到着できなければ、オルリコは自分の使命を果たすことさえできない。彼女はイラーナの言葉を己の心に言い聞かせた。

「ところでオルリコ、ひょっとしてあなたたち……駆け落ち？」

「……違います」

慣れない乗馬から来る全身の傷みと疲労との戦いとともに隊商の旅は続いた。昼は馬に揺られて草原を進み、夜はテントを張って眠る。食べる物は干し肉や乾燥させた野菜や果実で、水は残量を気にしながら惜しみつつ飲んだ。

晋粥を出発して四日目の夜、翌日の日暮れにはシャナドゥーへ到着すると劉が言った。隊商の商人や旅人たちは安堵の声を上げ、オルリコは指を折って数えた。結婚式まで十四日ある。ほっと息をついた彼女の横でイラーナも穏やかな笑顔を見せた。

「最初に盗賊に襲われた時はどうなることかと思っただけ、ここまですぐ無事に来られて良かったわ」

イラーナはオルリコたちが隊商に加わる前に劉たちと一緒に盗賊の襲撃に遭っていたのだ。その時は用心棒の誘導で命からがら逃げ出したと言っ

「本当だね。後は……間に合うといいね、イラーナ」

イラーナと同じテントに入りながら、オルリコは控えめに言った。

寢食を共にするうちに二人はすっかり打ち解けていた。イラーナは寢床に潜り込みオルリコに微笑んだ。

「……そうだね。あなたもこの分だと結婚式に間に合うかしら」

「うん。余裕だと思う」

明日で暁都を出てから七日だ。復路に同じくらいの日数がかつても十分間に合うはずだった。

「ねえ、オルリコ、親の死に目、ってどんな風だった？」

オルリコがイラーナの横に寝転ぶと彼女は静かに訊ねた。重い空気があつという間に二人きりの暗いテントに満ち、オルリコは風に震える天井の染みを目上げて目を閉じた。

「私は十四歳だったけど、結構、冷静だった」

一年前、暁都で流行った病に倒れ、両親はほぼ同時に亡くなった。倒れてから息を引き取るまでは幾日もかからず、オルリコはたった一人で両親の看病をした。何とか善くならないものかと医者を呼ぼうとしても、病の感染を恐れて医者は両親を診てもくれなかった。その病にかかった者は十中八九助からないのだ。

間もなく両親が死ぬ。絶対に助からない。そのことを悟ってから、オルリコは必死で考えた。彼らが死んでも自分は生きて行かなければならない、生きて行くためにはどうしたらいいのか。弱っていく彼らの傍らで一生懸命考えた。

「一番、確実な方法が結婚だなんて思ったの」

目を開き、オルリコは天井を睨んだ。養ってくれる夫がいれば衣食住には困らない。経済的にも精神的にも支えになってくれるはずである。

「だから、結婚式には絶対に間に合わせなくちゃいけないんだ」

口に出した瞬間、どうしてか絶影の顔が頭に浮かんた。隠しているわけではないが、彼にはまだ結婚式のことを言っていない。

オルリコは慌てて婚約者の顔を思い出そうとする。顔を見たのはたった二度だが、とても忘れようのない、美しい男性だ。彼と最初に会ったのは的頭村で、石を拾っていた彼女に彼から声をかけて来

た。その数日後、オルリコを嫁に欲しいと張を通して彼から申し出があった。彼女は二つ返事で承知した。

「生きて行くために？」

イラーナは眉を上げてオルリコを見た。オルリコは頷いた。

「うん、生きて行くために」

話が途切れると、二人は隙間風に身を縮め、宴会に興じる男たちの声を聞いていた。再び口を開いたのはイラーナだった。

「一緒に眠るのもこれで最後ね。なんだか名残惜しい」

とろりと眠たげな声で呟き、イラーナは目を閉じた。

「うん、名残惜しい。短い間だったけど、あなたと話せて良かった」

「私も、あなたがいてくれて良かったよ。楽しかった」

おやすみと言い合つて、二人は深い眠りに落ちていった。

オルリコは夢を見た。

「あなたが張さんの使用人のオルリコですか？」

青年はオルリコが名乗るより先にそう訊ねた。初対面のはずなのにどうして私の顔と名前を知っているのだろう。彼女は訝しんだが、彼があんまり素敵な男性だったのでそれを訊ねることができなかった。彼女は特に異性に対して引つ込み思案だ。

「僕は張さんの友人の関飛かんひです。よろしければ少しお話しませんか」
青年が柔らかに微笑む。場面が一転する。

「あの人が関飛さんだね」

「あの人がオルリコのお婿さんだね」

金華と銀河がオルリコの両脇で囁く。彼女は物陰から一人の青年を見つめていた。すらりと背が高く肩幅も広い、眉目秀麗で、商才のありそうな理知的な瞳に優しげな雰囲気、非の打ちどころのない男性だった。的頭村で出会った彼は数日後、張を通してオルリコへ婚約を申し込んできた。どんな男性か見てみたいと言う双子を連れ、彼女は関の家の前まで彼を覗きにやって来たのだ。

どうしてあんな素敵な人が私なんかを嫁に欲しいと言い出したのだろう。オルリコがしげしげと関を眺めていると、突然誰かに手を

つかまれた。

「待てよ」

振り返ると絶影だった。怒っている。

「君、本当にあいつと結婚するの？」

すでに金華と銀河の姿はなく、二人は星々の輝く夜の草原の真ん中に立っていた。彼は訊ねながらオルリコの手を両手でぎゅっと握った。ここまで彼女を護ってくれた手だ。

「それは……」

オルリコは自分の胸がドキドキと高鳴るのを感じた。彼のマメだらけの手は熱く、その手に触れられることは何とも心地良かった。でも彼の身長はオルリコと同じくらいで、体格も小柄な方だ。日焼けした顔は健康的で男らしいけれど眉目秀丽とまでは言えないだろう。

馬に乗ってる姿は格好いいのになあ。

オルリコが思った時、怒鳴り声と共に叩き起こされた。

「起きろ！持てるものだけ持て！」

目を開けるとテントの入り口に絶影が立っていた。オルリコは思考の覚醒を待たずに寢床から飛び起き、反射的にまとめてあった荷物を背負った。デールは着たまま眠っていたのですぐにテントから出る。まだ寝ぼけ眼の彼女の手には絶影が押し付けたのは手綱だった。手綱は冷たく濡れていた。雨が降っているのだ。

「速く乗れ！」

絶影の手を借り、言われるがままに馬に乗ってから、オルリコはようやく辺りを見回してぞっとした。風に乗って血の匂いがする。剣と剣がぶつかり合う音や人々の叫び声が聞こえた。隊商が襲われている。一気に目が覚めた。

「ぼけつとするな、逃げるぞ！」

愛馬の曹操に颯爽と跨り、絶影がオルリコの馬の脇腹を蹴った。オルリコの馬は曹操と共に走り出す。容赦のない全力疾走、かけあし駈歩だ。

「待って！イラーナが！」

振り返るとイラーナは驚愕の表情でテントから出てきたところだった。彼女の馬はまだ他の馬たちと共に繋がれているのだろう。彼女が馬の元へ無事に辿り着けるのか、馬に乗ることができたとして自力で逃げ切れるのか、オルリコには分からない。

「イラーナを助けなきゃ！」

「だめだ！もう戻れない！」

絶影は馬上から弓を放ち、二人を追いかけて来た盗賊を何人もしとめた。馬の背から転がり落ちた盗賊たちは派手な水しぶきを上げて泥の中に突っ込んだ。

「大丈夫だ、隊商には用心棒が四人もいる。盗賊の目的は物品であって殺戮じゃない。きつとみんな逃げられる」

じゃあどうして私たちだけ逃げるの。オルリコは叫びそうになって唇を噛んだ。絶影はすべて分かった上で言っているのだ。隊商が無事では済まないこと、自分たちが逃げ切ることと精一杯であること。分かった上で、できることならそうであって欲しいと絶望的な希望を口に出しているのだ。

「ごめん」

オルリコは絶影に謝った。雨と一緒に流した涙が口に入った。涙は悲しくなるほど温かくて、しょっぱかった。同時に彼女は金華と銀河の顔を思い浮かべて恨めしくなった。あの双子はオルリコがこんな目に遭っているなんて夢にも思っていないだろう。双子の面白半分の思いつきでシャナドゥーへ行かされることになった我が身を彼女は今さら情けなく思った。

一度惨めな気持ちに陥ってしまつと涙は次から次へと溢れた。雨足もどんどん速くなり、二騎は大雨の草原を、泥を跳ね上げながら疾走した。雨風の冷たさで手や頬の感覚が失われていったがオルリコは弱音を吐かず、手綱を握りしめて走り続けた。そうしながら、彼女は絶影も泣いていることに気が付いた。

彼は今まで大きな仕事をしたことがないと言っていた。実戦経験が少ないともぼやいていた。盗賊に寝込みを襲われることなど、き

つと彼も初めてなのだ。彼も怖いだろうか、不安だろうか、悔しいだろうか。だったら、私と同じだ。私と何ら変わりはない。この果てしなく広い大地の上で、こんなにも同じ気持ちを抱いている人間は彼以外にいない。そう思うと、励まされるような気がした。

「頑張ろう。きっと、みんな大丈夫だよ」

オルリコは絶影に笑って見せた。涙に濡れ、かじかんだ頬でうまく笑えたかどうかは分からなかったが、絶影も唇の端を上げて頷いた。

5・命を賭ければノウラムレン大草原

盗賊に襲われた野营地を逃げ出ししばらく走った後、二人は馬を下り手綱を引いて草原を歩いた。大雨は振り続いていたが少しでも遠くに逃げようと彼らは夜を徹して足を動かし続けた。少し休憩しようとして絶影が提案したのは雨がやみ朝日が昇り始めてからだった。彼らは草原の真ん中に座り込んでずぶ濡れの荷物の中から焼き菓子を取り出して二人で分けた。

「ここ、どの辺りかな」

焼き菓子を飲み込みながらオルリコが呟いた。絶影もそれを考えていたところだった。疲労とショックのせいで二人とも一晩中黙りこんでいたが、甘い食べ物を口に入れると少し元気が出て来た。

「太陽が向こうから昇って来てる。シャナドゥーから遠ざかっちゃったな」

昨夜もし晴れていれば星を見ながらシャナドゥーの方角へ逃げられたかもしれない。道標が雲に覆い隠されていたことを絶影は内心で悔しがった。

「今夜は野宿することになるかもしれないけど、とにかく東に向かって歩こう。馬はいざという時のために引いて行こう」

いざという時というのは賊に襲われた時のことだ。全速力で逃げるために馬の体力を温存しておきたい。馬たちは丈の低い草の中に頭を突っ込み、好みの草をのんびりと食べている。いつの間にか雲が晴れ、頭上に洗いたての青空が広がっていた。昨夜の逃避行が嘘のようだ。

「草原の空はさ、雨上がりが一番いいんだ」

絶影は空を見上げ、背中の屋筒を地面に下して矢の残数を数えた。あと三本。この矢で随分多くの盗賊を倒した。残った矢は濡れてしまっている。羽根の部分を拭きたいのだが、あいにく乾いた布がない。風が乾かしてくれるのを待つしかないさそうだ。

「砂埃が立たないから、空気がすごく澄んでるんだよ」

絶影はごろりと仰向けに寝転んだ。濡れた草は彼の身体を優しく受け止め、爽やかな風がそよそよと彼の髪を揺らした。オルリコも彼の隣に並んで横になった。彼らの真上を白い雲の塊が通り過ぎ、その雲の影が二人の身体の上に落ち、ゆっくりと静かに横切って行った。

「みんなとはぐれちゃって、シャナドゥー、辿り着けるかな」

しばらくするとオルリコが呟いた。絶影は彼女が不安で泣き出したらどうしようかと思ったが、オルリコの声はしっかりしていた。それどころか、どこか他人事のような口ぶりにも聞こえた。

「考えてもしょうがないよ」

絶影は目を閉じた。盗賊の襲撃と逃走劇の興奮が冷め、今は眠くてたまらなかった。

「ねえ、君は何のためにシャナドゥーへ行くの？」

彼はこれまでも何度かそれを訊ねたが、その度にオルリコに答えはぐらかされていた。どうせまた教えてくれないんだろぅなと思いつつ、彼は睡魔と戯れながら彼女の返事を待った。

「……布を取りに行くんだよ」

澄んだ青空を見上げたまま、オルリコは言った。

「……は？」

夢の世界に片足を突っ込んでいた絶影は聞き間違いかと思い、身を起してオルリコの顔を見た。彼女は平然とした様子で寝転んでいる。

「シャナドゥーの中央広場には大きな木があって、金華さんと銀河さんは昨年、その木の枝に布を結びつけたんだって。それを取りに行くの」

「……え？」

「それが私の最後の仕事」

風が吹き、丈の短い草や二人の髪や服がざわざわと揺れる。

絶影は鼻で笑ってしまった。心底から自分たちが情けなく思えた。

「そんなことのために命を賭けて旅して、盗賊に襲われて、命から逃げ出して」

一緒に旅してきた仲間を見捨てなければならなくて。

「馬鹿馬鹿しいと思わないのか？」

彼は身を乗り出してオルリコを問い詰めたが、彼女は耳を塞ぐかのように目を閉じてしまった。聞く耳を持たない彼女に彼は苛立った。

「今から引き返して、布は風で飛ばされちゃってましたって言えばいいんじゃないのか？ だいたい、何だよ、あの双子！ もしかして最初からオルリコに取りに行かせるために木に布を結びつけたのか？ 一年も前に？」

「あのさ」

一人で熱く喚く絶影を、オルリコは落ち着いた口調で制した。彼女は上半身を起こし、彼の顔を真つすぐに見た。初めて会った時と同じ印象的な黒い目で見つめられ、彼は一瞬どきりとした。

「確かに、私はくだらない事をしてると思う。隣町に飴玉を買いに行ったり、的頭村を訪ねて花や石を持ち帰ったり、シャナドゥーへ布を取りに行ったりね」

彼女は少し自嘲気味に微笑んだ。

「でも、一度やると決めた仕事を途中で投げ出したくない。どんなにくだらない仕事でも命を賭ければそれだけの価値が生まれると思う」

オルリコはいつになく強い口調で言い切り、絶影を睨んだ。

彼は仕事の価値など考えたこともなかった。くだらない仕事はくだらない仕事だし、つまらない仕事はつまらない仕事だと思っていた。自分の心がけ次第で仕事に付加価値が生まれるとは思えない。

「俺には分かんない」

「うん。分かってくれたらいいなとは思ってたけど、分かんなくてもいいよ。君の仕事は私を護ることであって、私を理解することじゃないもの。でもね、両親が死んでから今日まで私が生きてこれ

たのは、私に仕事を与えてくれた張さんたちのおかげ。彼らに与えられた仕事をこなすことが、私が生きて行くための唯一の手立てなんだよ」

オルリコは苦々しげに笑って少しだけ俯き、すぐに顔を上げる。

「だから、私をシャナドウへ連れて行って」

濡れたような黒い瞳に見つめられる。吸い込まれそうだ。

「お願い、絶影」

絶影は立ち上がった。休憩は終わりだ。

「分かったよ」

本当はちつとも分からない。なぜ彼女がこんな理不尽な目に遭わなければならぬのか、腹立たしくて仕方がない。だが、彼女に何かを請われて断るなんて彼にはできなかった。それはオルリコが客だからというだけではない。

「ねえ、さつき『最後の仕事』って言った？」

馬を引き、東に向かって歩きつつ絶影は訊ねた。オルリコは少し離れたところを歩きながら躊躇いがちに答えた。

「日程的に余裕があったから黙ってたんだけど、私、十三日後に結婚するの」

「え」

絶影は愕然として足を止めた。何故かひどくがっかりする自分がいた。胸の上に石でも乗せられたような気分だった。

「だ、誰と？」

「新町の関飛さんって知ってる？張さんの知り合いの商人」

新町の関飛。男前で背が高く頭も切れるという評判の男だ。

「……知ってる。時々、衛世館に来るお得意様。……ま、まさかあの色男と君が仲良しだった、なんて、ねえ、あはは」

シヨックを隠そうと笑ってみたが我ながらとてつもなく不自然だと彼は落ち込んだ。

「仲良しなんかじゃないよ。的頭村に石拾いに行った時にたまたま関さんに声掛けられて、湖のほとりで少しお話して、その後暁都ま

で送ってくれたのが最初で最後だもの。張さんを介して婚約してから、金華さんと銀河さんと新町まで覗き見に行っただけだ」

オルリコは不機嫌そうに言い、絶影を追い越して行く。

「だから結婚式までに絶対に暁都に帰ってなくちゃいけないんだ」
彼女に何か言い返そうとして、彼は大地を駆けてくる蹄の音に気が付いた。辺りを見回すと近づいてくるのは一騎だけだった。緑色のデールを着た青年が白い馬に跨り泥を跳ね飛ばしながらやって来る。

「遊牧民だ」

心配そうに眉根を寄せていたオルリコに微笑み、絶影は遊牧民に手を振った。彼に道案内をしてもらえれば万々歳だ。

「うつす、こんなところでどうした？おまえら二人きりか？」

遊牧民の青年は二人のそばで馬を止め、馬上からにっこり微笑んだ。日に焼けた顔は面長で目も細長いがどうしてなかなかの男前だった。年は二十代前半くらいだろうか。

「シャナドゥーへ向かう隊商が盗賊に襲われてみんなとはぐれたんだ。道も分からないし、迷惑じゃなきゃシャナドゥーへ行く方法を教えてもらえないか？」

絶影が進み出て頼むと遊牧民の青年は朗らかに笑って胸を張った。
「おう、いいぜ。だけど、おまえらさぶ濡れだし、腹減って疲れてんじゃない？服を乾かしがてら、おれん家で少し休んでだよ」

二人は馬に乗り、青年の言葉に甘えて遊牧民の集落を訪ねた。集落にはいくつものゲルが点在しており、青年はその中のひとつに彼らを招き入れた。二人は背中を向け合って濡れた服を脱ぎ、青年の用意してくれた清潔な服を身にまとった。びしょ濡れの服はゲルとゲルの間に紐を渡し、そこにぶら下げて干した。

「そうそう、おれはサルキンだ。おまえらは？」

薄暗いゲルの中で、青年は椀に牛乳茶を注ぎ、それを二人に手渡ししながら名乗った。

「俺は絶影だ」

「私はオルリコ。よろしく、サルキーン」

「絶影にオルリコな。おまえら、ひょっとして駆け落ちか？」

遠慮なく牛乳茶に口をつけていた二人は吹き出しそうになった。

どういつもこいつも、そんなに駆け落ちに見えるのだろうか。

「私は用事があってシャナドゥーへ行かなきゃならないの。彼はただの用心棒」

何が用事だ。何がただの用心棒だ。絶影は訳のわからない不機嫌の虫につかまってしまったような気分だった。どうしてこんなに苛々するのか……。

「なあんだ、つまんねえな。あんな、ここから一番近い町がダグンホトってとこなんだ。そこからシャナドゥーまでは道が敷かれてるから、ダグンホトまでおまえらを案内してやるよ」

サルキーンはオルリコにっこりと微笑み、彼女も嬉しそうに笑顔とお礼の言葉を返す。それを見て絶影はますます面白くない気持ちになる。

「親父とお袋が今夜は御馳走にするって言うから泊ってけよ」

その晩は二人のために歓迎の宴が催された。羊料理と馬乳酒が振る舞われ、馬頭琴の哀しげな音色と伝統歌ホーミでもてなされ、彼らはくたくたになるまで笑った。

サルキーンには弟妹が七人いた。両親と祖父母も健在で、彼らは三つのゲルに分かれて寝起きしているという。絶影とオルリコは男女別に分かれサルキーンや彼の弟妹たちと同じゲルで眠ることになった。

その夜、疲れているにもかかわらず絶影はなかなか寝付けなかった。眠ってしまったサルキーンたちを起こさないようそつとゲルの外に出ると頭の上に満天の星空が広がっていた。気が遠くなるような思いで星々の海に見入っていると、どこか遠くのゲルから歌声や笑い声が聞こえた。若者たちが酒を飲んでまだはしゃいでいるのだろう。楽しかった宴の余韻を噛みしめながら、絶影は故郷の家族のことを思い出した。

「眠れないの？」

後ろから声をかけられ、絶影はどきりとした。用心棒として訓練されているため人の気配には敏感なのだが、よほどぼんやりしていたのか気が付かなかった。振り返るとオルリコが寒そうに身を縮めて立っていた。

「星、綺麗だね」

のんびりと言いながら彼女は絶影の隣に並んだ。昼間は頭天边でまとめているお団子髪を今は背中に垂らしている。懐かしい気持ちにさせるいい匂いがふわりと漂った。

「うん、綺麗だ」

絶影は再び星空を見上げた。二人はしばらく黙って星を見ていた。その時、彼は彼女との沈黙の時間が好きだと思った。互いに何も言わず、ただ同じものを見ているだけで、彼女と深いところで繋がっているような気がして優しい気持ちになった。

「あのさ、俺、ずっと大きな仕事があったんだ。有意義でかつこい仕事。要人を護るとか、世界を股にかける貿易商に雇われるとか」

「うん」

「今まで碌な仕事にありつけなかったから、君に旅の護衛を頼まれた時、すごく嬉しかった。やっと俺にもまともな仕事があったんだって思った。俺を信じてくれるって言うてくれた君を、命を賭けて護ろうと思った」

「……うん」

「だから、君の旅の目的を聞いてがっかりした」

やっぱり、俺に回って来る仕事なんて碌なもんじゃないんだと落胆した。

「ごめんね」

オルリコが申し訳なさそうに謝ったので、絶影は慌てて首を振った。彼女に文句を言いたいわけではないのだ。

「いや、違うんだ。俺、やめたんだ」

二人は同時に互いの顔を見た。オルリコは困惑したような顔で首をかしげる。その小動物のような彼女の様子がおかしくて彼は思わず微笑んだ。

「仕事の価値とか、意味とか、考えるのやめたの。俺は俺の仕事を全うする。君は君の仕事を全うする。とりあえずは、それでいい気がする」

オルリコがシャナドゥーへ布を取りに行く。彼女はそれを一生懸命やる。それなら、俺はそれを助けるまでだ。彼女を護るまでだ。それだけのことだ。

「……ありがとう」

彼女は彼が思わずどきりとするような、とびきりの笑顔で言った。

翌日、サルキーンの先導で草原を東へ進み、彼らはダグンホトを目指した。その日は一日中晴天に恵まれたものの、途中で出会った川は一昨日の雨の名残で茶色く濁っており、勢いよく流れる濁流を馬で渡り切った時にはほっとしたものだ。

オルリコは乗馬の旅に大分慣れた様子で、気さくなサルキーンと楽しそうに会話しながら上手に馬を操っていた。どうやら旅を満喫しているようだ。草原の風に吹かれ、太陽の光を浴び、彼女の表情は生き生きと輝いていた。

その日の夕暮時、小高い丘の上でサルキーンが馬を止めた。

「あれ、何だと思う？」

サルキーンが指したのは遠くの丘の上に見える黒っぽい壁だった。壁は稜線に沿ってどこまでも続いている。

「三国志の時代に造られた万里の長城だぜ。男たちの夢の跡だ」

彼は面白そうに笑い、馬をゆっくり歩かせながら遊牧民の歌を歌った。

おれたちが馬に乗るのは
地平線の向こうを夢見ているから
無限の可能性を手に
草原や砂漠を抜け
大河や海原を越え
青天や星空を駆けまわりたいから

おれたちが旅をするのは
万物が移りゆくことを知っているから
頭の上を流れる白い雲
沈んでゆく大きな夕日
瓦礫と化した男たちの夢の跡
今を生きることだけをその胸に誓っているから

ごらん
非力でちつぽけな人間が
馬に乗った途端にどんな山も越えてゆけると笑う

ごらん
つまらなそうに走っていた馬が
乗り手を得た途端に生き生きと野を駆けまわっている

人は馬に自由を与え
馬は人に自由を与える
おれたちが旅するのは
与え、与えられ、ともに自由になれるから

その晩、三人は別の遊牧民の集落に一泊した。客人を厚くもてなすのはどこも同じようで、彼らは大いに歓迎された。宴会が終わると提供されたゲルでぐっすりと眠り、翌日の午後、三人はダグンホトに到着した。

「ここまで来ればシャナドゥーはすぐだぜ。明日の朝ここを出れば夕方には着くだろう」

サルキーンは市門の前で馬の頭を返し、あつさりと手を振った。

「じゃあおれは帰るからな、あばよ！」

絶影は彼に何かお礼をしたかったのだが、サルキーンは見返りも求めずに去って行った。彼が颯爽と駆けて行く後ろ姿を見送り、二人はダグンホトに入った。安宿に部屋を取り、食料や矢を調達し、久々の入浴と酒家での夕食を済ませて、その日は早めに床に就いた。長旅と二晩連続の宴会がこたえていた。

「ねえ、暁都に帰っても私たちまた会えるよね？」

寢床に潜り込むなり、衝立の向こうのオルリコが話しかけて来た。絶影はくたくたで今にも眠り込んでしまいそうだったが、この旅が終わった時のことを思うと切ない気持になった。

「……どうだろうな。君が関さんと一緒に衛世館に来るなら会えるかもしれないけど、お互い、変な疑いかけられるのは御免だよな」

言葉にするとずきんと胸が痛んだ。絶影はぎゅっと目をつぶった。暁都に戻った後のことは、暁都に戻ってから考えればいい。今はまだ考えたくない。

「もつと君と話したいな」

彼の気も知らずにオルリコはしつこく話しかけてくる。

「話せるだろ。暁都に帰るまで一週間かかるしさ」

「そうじゃなくて、これから君がどんな仕事するのかとか、どんな生活を送るのかとか、私、知りたいもの。晋粥であれだけ名前を売ったんだから、これからどんな仕事がくるんじゃない？」

「だとしても、君はもうすぐ人妻になるんだから、俺なんかと遊ん

でる暇ないだろ？」

あと十一日で彼女は結婚する。決して手の届かないところへ行ってしまう。苛立ちに任せてきつい言い方をしてしまったせいか、オルリコはしゅんとして黙ってしまった。

「もう寝ようぜ」

絶影は音をたてて寝返りを打ち、オルリコ側の衝立に背を向けた。彼女はそれきり話しかけてこなかったなので彼はあっという間に眠りに落ちて行った。

6・本当は違う／シャナドゥー

翌朝、二人は馬に乗ってダグンホトを出発した。ダグンホトとシャナドゥーの間には道が敷かれており、人や物の行き来も多く、彼らは道に迷うこともなく安全に旅をした。何度か休憩を挟みながらシャナドゥーへ辿り着いたのは夕方だった。

オルリコはシャナドゥーの市壁が地平線に見えた時の感動を一生忘れないだろうと思った。町をぐるりと囲む高く白い壁が夕焼けの色に染まり、壁の中のいくつもの背の高い建物も同じ色に輝いていた。

「大きな町だね。暁都と同じくらいかな？」

オルリコは市門をくぐりながら隣の絶影に話しかけたが、彼はきよきよと辺りを見回していて彼女の話など聞いていない。文句を言っただろうかと思ったが、彼は突然興奮した様子で彼女を振り向いた。

「オルリコ、見ろよ！」

絶影が指したのは葬列だった。喪服を着た行列の中に見覚えのある顔があった。

「イラーナ！」

隊商で親しくなり、盗賊に襲われた夜に離れ離れになったイラーナが葬列の先頭の方を歩いている。彼女は父親が危篤状態だから故郷のシャナドゥーへ帰るのだと言っていた。父親の死に目に間に合ったのかどうかは分からないが、彼女の無事を確認することができてオルリコは心からほっとした。

「良かった……！」

イラーナに声をかけることはできなかったが、オルリコは嬉しくてたまらなかった。思わず絶影の手を握ると、彼も嬉しそうに笑った。その時、葬列の中のイラーナと目が合った。彼女は驚いたように目を見開き、それから小さく微笑んで人ごみに紛れて行った。

二人は中央広場の近くに宿をとって馬を預け、一年前に金華と銀河が布を結びつけたという広場の木を探しに行った。広場を訪れて驚いたのはその木が想像以上に大きかったことだ。彼らは広場の入り口であんぐりと口を開けた。

「うわあ、大きい……」

「な、何だよ、これ……」

その木はシャナドゥーで一番大きな寺院の目の前に立っていて、枝に葉が一枚もない白い大木だった。大木の裸の枝には色とりどりの細長い布が無数に結び付けられ垂れ下がっている。まるで枝っぱいに葉が覆い茂っているようだった。

「おや、ご存じではないとは」

仰天する二人に声をかけて来たのは商人風の壮年の男だった。どこかで見た顔だと思ったら、彼らが部屋を取った宿の主だ。

「これ、何ですか？」

オルリコが訊ねると、宿の主は樹齢何百年かの大木を前に目を細めた。

「これは祈りの木です。シャナドゥーへやってきた旅人が自分の旅装の一部を切り裂きそれに願い事を書いて枝に結ぶと願いが叶うと言われています。願いがかなった時、旅人はそれをほだきに再びシャナドゥーを訪れ寺院に寄付することになっています。もし本当に願いが叶っていれば、布をほだく時に木が七色に光ると言われていますが、まあ、みんな無謀な願いを書いていますし、願いが叶ったところで二度とシャナドゥーを訪れることのない者も多いので私もこの目で見たことはありません」

白い大木は満月を背にして、紫色の夜の闇に浮かび上がるように立っている。それが七色に光り輝くなんてさぞ美しいだろう。

「君、今の話、知ってた？」

宿の主人が二人から離れて行くと、絶影は狐につままれたような顔でオルリコを見た。オルリコは首を横に振った。まさか双子の御遣いがそのようなものだとは、彼も彼女も思っていなかった。

「私、金華さんと銀河さんが願い事を書いた布、探すよ」

木の下に行くとき垂れ下がった布の先が頭天边に触れた。近くで見ると何十年も雨風にさらされてきたような古びた布もあれば、昨日今日に結び付けられたような新しいものもある。

「こんなに沢山ある中から探せつてのか？」

絶影は目を凝らすように祈りの木を見上げ、うんざりしたように言った。オルリコも思わず肩をすくめた。「大金持ちになれますように」「科挙に合格して立派な役人になれますように」「子宝に恵まれますように」「女房の病気が善くなりますように」「商売繁盛」「旅の無事」……書きつけられた様々な願い事を眺めながら、金華と銀河は何を願ったのだろうとオルリコは考えた。ほどこいて持ち帰れと言うからには、二人の願い事は叶ったのだらう。

「金華さんの布は赤、銀河さんの布が青だよ」

オルリコは懷から双子の旅装の切れ端を取り出した。「これが見本だよ」と双子に持たされたのだ。

「赤も青もいっぱいあるぜ……」

二人で木の下を数刻うろつた後、彼らはようやく金華と銀河の布を見つけた。どちらも高い枝に結び付けられていて、木に登らなければ到底手が届かない。先に絶影がひよいひよいと祈りの木に登り、オルリコは彼の手を借りて何とか枝によじ登った。

木の上から広場や街を見下ろすと、何とも爽快な気分だった。闇に包まれた街のあちこちに赤い提灯がゆらゆらと揺れている。夜が更け、広場にはほとんど人影がなく、屋台が店じまいをしている以外は、旅人に声をかける宿屋の客引きがうろついているだけだった。

「これだ、金華さんの布」

ピンクに近い赤色の布を手に取り、オルリコは固い結び目を器用にほどいた。

「あ……！」

布が枝からずりりと自由になった瞬間、白い大木がぼんやりと白く光った。広場にいた人たちは気が付いていない様子なので気のせ

いかと思ったが、絶影は目を丸くしてオルリコの顔を見た。

「今、光ったよな？それ何て書いてあったんだ？」

絶影が覗きこんできたので、オルリコは布を広げて金華の聡明そうな字を読んだ。

『留守番のオルリコが元気になっていつかシャナドゥーへ来られま
すように』

一年前、張一家がシャナドゥーを訪れた時、オルリコは暁都で留守番をしていた。両親を亡くしたばかりで気落ちしていたので同行を断ったのだ。

「確かに、願いが叶った、よな」

「うん……」

だが、まさか金華が留守番をしていたオルリコのことを案じ、願い事を書いてくれたとは思ってもみなかった。祈りの木を見上げると枝はまだ薄ぼんやりと光っている。胸に熱いものがこみあげてきて涙で視界がゆがんだ。

喜びに浸りそうになる自分を振り切るように彼女は銀河の布をほどこにかかる。布は枝の先端の方に結び付けられていた。思い切り身を乗り出し、手を伸ばし過ぎて枝から落ちそうになったオルリコを絶影が後ろから抱きしめるように支えてくれた。小柄だと思っていた彼の腕は存外にたくましく、オルリコの胸はときどきと高鳴った。彼の手に支えられていると何もかも心から安心でき、布の結び目が永遠にほどこなければいいのにと思ったほどだ。

銀河の青い布がほけると絶影はオルリコを自分の方に引き寄せた。

「今度は何にも起こらないな」

「うん」

白い大木は先ほどのように光らず、枝から垂れ下がった無数の布がそよそよと風に吹かれて揺れるばかりだった。二人は布に書かれた文字を見た。

『オルリコが幸せになりますように』

青い月明かりに照らされた祈りの木に沈黙が下りる。

二人の書いた願い事にオルリコは困惑した。あの双子はいつもオルリコを困らせるために彼女に意地悪な御遣いばかりさせ、毎日毎日我儘の限りをつくしている。それなのに、どうして彼女のためにこんな願い事を書いてくれたのだろう。

「ひよつとして、全部、好意だったんじゃないか？」

布を握りしめたまま戸惑うオルリコに絶影は確信したように言った。

「隣町に飴玉を買いに行かせたのも、ずっと張さん家にこもってる君を外に出してあげようと思っただけで。的頭村に石拾いに行かせた時はきつと関さんと出会わせるためで。この旅も、独身最後の旅行をプレゼントしたつもりだったのかも。二人とも全部、君のためって思ってたんじゃない？」

金華のさらりとした字と銀河のつたない字を見つめるうちに、オルリコの目から涙がこぼれた。一度泣き始めると堰を切ったように次から次へと涙があふれてくる。双子の旅装の一部を握りしめ、絶影の腕に顔を押し付けてオルリコは泣いた。絶影は小さく笑い、オルリコを優しく抱きしめて彼女の頭をそつと撫でた。

「泣くなよ。喜ぶとこだろ？」

「だって私、ずっとずっと、あの人たちが私に意地悪してるんだと思ってた。私のことが嫌いで、私を困らせたいんだと思ってた。みんなもそう言うから」

「世間の噂と、本当のことは違うって、俺に言ったのは君だろ」

絶影はけらけらと笑った。

そういえば、隣町に飴玉を買いに行った時、菓子店の近くで大きなお祭りをやっていた。両親の死の悲しみを引きずり憂鬱な気分では歩いていた彼女は賑わう街を抜け、太鼓や笛の音を聞いているうちにいくらか明るい気持ちになれたような気がする。

的頭村へ花を摘み行った時は春の盛りで、村のあちこちで花が咲き乱れ、雪解け水で満たされた湖がいつもより青く美しかった。

石拾いに行つた時は関がどこからともなく現れて彼女に声をかけてきた。今から思えば偶然の出会いではなかったような氣もする。初対面の彼はなぜかオルリコの顔と名前を知つていて、彼女が名乗るより先に「あなたが張さんの使用人のオルリコですか？」と訊ねたのだつた。

「でも、何で木が光らないんだろう。――君、幸せじゃないの？」
「そんなの分かんないよ」

双子の真意を知ることができて嬉しくてたまらないのは確かだが、「布をほどいて来いって言つたからには、例の双子は願いが叶つて君が幸せになつたと思つてゐるわけだよな。将来有望な商人との結婚を控えてゐるわけだし」

言いながら、絶影は自分の手を彼女の手に重ねた。いつか夢で見た時と同じように、彼女は自分の胸がときどきと高鳴るのを感じた。彼のママだらけの手は想像以上に熱く、その手に触れられることは何とも何とも心地良かった。

その時、広場に残つていたごく少数の人々が祈りの木を見上げてざわつき始めた。仰ぎ見ると木が淡く光っている。すかさず絶影がオルリコの顔を覗きこんだ。

「幸せつてこと？」
「知らないよ！」

頬を染めて声を荒げた彼女の額に彼は自分の額をくつつけた。二人は黙つて見つめ合い、お互いの心臓の音や呼吸の音を聞いていた。オルリコは絶影の黒い瞳を見つめながら、彼が何を考えているのか知りたくてたまらなかつた。

「君、本当にあいつと結婚するの？」
彼は静かに訊ねた。

「それは……」
言いかけたオルリコの唇を彼の唇が覆つた。重なつた手と唇から彼の熱い氣持ちが流れ込んでくるような氣がしてオルリコは眩暈に似た感覺を味わつた。婚約者とさえ交わしたことの無い口づけを出

会って間もない少年と交わしている。初めての経験に心が震え、甘い罪悪感に飲まれる。どうしてか、時が止まればいいと思った。

「目、開けて」

促されて閉じていた目を開けると、すぐ近くに絶影の優しげな顔が見えた。辺りがまるで昼間のように明るい。祈りの木が虹色に光り、木に垂れ下がった無数の布までもが輝いている。

「綺麗……」

彼女は呟き、二人を包む七色の光に見とれた。

「うん、綺麗だ」

彼はオルリコの手を握る力を強めた。それきり何も言わず、二人はしばらく木の上で光り輝く祈りの木を眺め続けた。青い月の照らす紫色の夜はそうして更けていった。

翌朝、目覚めると宿の客室に絶影の姿はなかった。昨夜眠る前に朝になったら隊商宿へ行つて暁都へ向かう隊商がないか訊ねて来ると言っていたので、それで出かけているのだろう。

オルリコは身支度を済ませると持参した道具で暁都の張家へ手紙を書いた。無事にシャナドゥーへ辿り着き、金華と銀河の旅装の切れ端を見つけることが出来たと記し、結婚式までには必ず帰ると書き添えた。

結婚式。

オルリコは昨夜、祈りの木の上で絶影と交わした口づけのことを思い出した。あの時、祈りの木は七色に光り輝き、その幻想的な光で二人を包み込んだ。彼女は幸せだった。これが幸せというものなのかとしみじみと思った。だが、あの時のような気持ちを、結婚してから再び得ることができるのだろうか。関との口づけも、あんな風に素敵なものだろうか。

ため息が出た。

絶影は昼前に戻って来るなり、興奮したようにオルリコの手を引っ張って宿の一階の食堂に彼女を連れて行った。

「やあ、無事で何よりだ」

食堂の椅子から立ち上がり、そう言って笑ったのは隊商長の劉だった。晋粥で出会い、盗賊に襲われるまで共に旅をしてきた彼もシヤナドゥーへ辿り着いていたのだ。

「暁都に帰る隊商を探しに隊商宿へ行ったら、偶然、劉さんに会ったんだ」

絶影は満面の笑みを浮かべて嬉しそうに言った。こうして再び劉に会えるとは彼も思っていなかったのだろう。

「劉さんもご無事だったんですね。良かった」

世話になった隊商長の劉や親しくしてくれたイラーナの無事を確認することができて本当に良かった。オルリコは嬉しくて天地の神と先祖に感謝したい気分になった。

「絶影君が盗賊の半分以上を倒してくれたおかげで逃げられたのさ。私はしばらくシヤナドゥーへ留まる予定なんだが、知人の隊商が明後日、暁都へ向けて出発することになっているんだ」

食卓に昼食の皿が運ばれてくると、劉は話しながら箸を取った。

絶影も饅頭まんとうを左手でつかみ、右手の箸で豆腐炒めを口に詰め込みつつオルリコに目を向ける。

「隊商に加えてもらえることになったから明後日には出発するぞ。」

それなら間に合うよな——結婚式に」

オルリコの結婚式は九日後だ。暁都まではおおそ六日かかるので、結婚式の二日前に帰宅できる計算だ。

「……うん……間に合う」

「……良かったな」

それきり、絶影は黙々と食事を続け、時々劉と会話するだけでオルリコの顔を見ようとしなかった。彼女は気まずい思いで昼食を取り、やがて劉と別れた。今度こそ最後の別れかと思ったが、しば

らく隊商宿にいるから麻雀でもやりにおいでと劉は気さくに言つて去つて行つた。

午後は雨が降つた。どこにも出かけられず、オルリコは窓を開けて窓辺に腰掛け、宿の前の通りをぼんやりと眺めたり、遠くに見える祈りの木に旅人が布を結び付けて行く様を観察したりしていた。絶影は床で筋肉の鍛錬を始めたがすぐに飽きてしまったのか、オルリコの書いた手紙を出して来てやると言つて雨の中を無理に出かけて行つた。

次の日も小雨がぱらぱらと降り、二人は一日中室内でほとんど黙つて過ごした。夕方になつて雨がやむと、絶影が買い物に出ようと言い出した。翌日から始まる旅に向けて準備しようと言つたのだ。

「それに、双子にお土産の一つも買つてやつた方がいいんじゃないの？」

オルリコはデールの内ポケットに財布を入れて簡単に身支度し、絶影と並んで宿を出た。絶影も手ぶらだったが彼は腰に剣を帯びていた。

とりあえず街の中心部へ歩き始めるとあちこちに露店が出ており、オルリコは度々足を止めて品定めし、若い娘の営む店で金華と銀河のために色違いの耳飾りを買つてやつた。絶影は非常食を少し買い足しただけで、後はオルリコの買い物に付き合つてくれた。振り回してばかりで彼に悪いと思ひ彼女が露店のゴマ団子を奢つてやると、絶影はオルリコに髪飾りを買つてやると言い出した。

「要らないならいいけど」

びっくりして目を丸くするオルリコに絶影は頬を染めて顔を背けた。

「要る」

オルリコは彼女のお団子頭と紫色のデールに似合う深緑色の玉のついた髪飾りを選び、それを早速、髪に刺した。買い物を終えると、二人の足は中央広場に向いた。祈りの木の前まで来ると、どちらからともなく願ひ事を書こうということになった。

宿に戻り、絶影の剣で服のごく一部を切り裂いて墨で文字を書く。お互いに何を願ったかは見せ合わなかった。二人は黙って祈りの木へ向かい、手を伸ばして布を枝に結び付けた。オルリコは布を結びつけながら、そういうえば雨風にさらされながら、どうして祈りの木の布の文字は消えないのだろうと不思議に思った。

今夜も闇の中にぽっかりと青い月が浮かんでいた。

「何て書いたの？」

少し離れた所から木を眺めていたオルリコに、絶影は今さら訊ねてきた。

「そういう君は何て書いたの？」

「そりゃあ……早く一人前になれますように、とか。背か伸びますように、とか。君は？」

「秘密」

「何だよ。俺のは教えたじゃん」

「だって恥ずかしいもの」

「俺だって恥ずかしいっての！あ、俺に恥じらいがないとでも？」

「うん、なさそう」

怒る絶影と笑い転げるオルリコはじゃれ合いながら広場を横切つて宿へ向かう。都会の雑踏に紛れると、はぐれないようにと絶影が彼女の手をつかんだ。赤い提灯の光が揺れる雨上がりの夜の街はしつとりと賑わい、空元気の自分たちがひどく浮いているように思えた。

「あのさ、暁都に戻ったら……」

前を向いて歩みを進めながら絶影は切り出したが、なかなか言葉の先が続かなかった。

「ねえ、何？」

オルリコは期待を込めて訊ねた。何でもいいから、暁都に帰った後の約束が欲しかった。旅が終わると同時に彼が他人になってしまふなんて嫌だった。

「……ごめん、何でもない」

彼は厳しい表情を前に向けたまま口をつぐんでしまった。

オルリコの胸はずきんと痛んだ。

「そう……」

晋粥の相撲勝負で大立ち回りを繰り広げたから、きつと彼にも少しづつ仕事がかかるだろう。一人前の用心棒になるために一生懸命に仕事をこなし、恐らく彼は日に日に逞しくなっていく。全うすべき仕事と、忙しい毎日が待っているのだ。オルリコに構っている暇などないに違いない。

一方、オルリコは旅から帰ったらすぐに結婚式を挙げる。関家に嫁ぎ、そこで新しい生活が始まる。関飛を夫とし、彼を支え、関家の跡継ぎを産むと言う大切な使命も待っている。子供が産まれたら子育てに追われることだろう。

——私たちの人生には、もうどこにも接点などないのだ。

胸がずきんともう一度痛んだ。

——どこをどう探しても、接点などない。

ずきん、ずきん、ずきん。

——私たちは旅が終わったら、他人に戻るしかないのだ。

気が付くと両目から涙がこぼれ出していた。こんな人ごみで泣くのは嫌だったが、誰も彼も、隣の絶影さえも、彼女の涙に目をとめてなどいない。ぼろりぼろりとこぼれる涙は冷たい頬に流れ落ち、顎を伝って旅を共にしたデールに沁み込んでいく。

『君はもうすぐ人妻になるんだから、俺なんかと遊んでる暇ないだろ？』

三日前の夜、彼は冷たくそう言ってオルリコに背を向けた。その意味がようやく彼女にも理解できた。

彼に気づかれないように、オルリコはそっと涙をふいた。絶影は相変わらず怒ったような顔で前方を凝視している。彼の顔を横目で見ながら、オルリコはほんの少しだけ、甘い甘い夢を見た。彼がオルリコをお嫁に欲しいと言って、関飛から彼女を奪ってくれるのだ。用心棒の夫と可愛い子供たちに囲まれ楽しく忙しく幸せに暮らす自

分を夢想して、オルリコの心は躍った。そしてそれが叶わぬ夢だと思ひ知り、そつと、唇を噛んだ。

7 めめんね／青海草原

懐かしの暁都を目指してシャナドゥーを出発したのは明け方だった。前日に雨が降ったせい、空がとても澄んでいて、夏らしい青い空に白い太陽がきらきらと輝いている。

絶影は馬をゆっくり歩かせながら、たまたまその隊商に雇われていた衛世館の用心棒と世間話をしながら旅をやり過ごすことにした。旅は順調に進み、それからの五日間は悪天候に見舞われることも盗賊に襲われることもなく、無事に過ぎて行った。

オルリコとはなるべく二人きりにならないようにした。彼女が彼を避けているような気がしたからだ。婚約者がいる身のオルリコの手を握ってしまったり、彼女に口づけしてしまったことが不信につながったのかもしれない。だが、絶影が贈った髪飾りを彼女がいつも髪に刺していることが彼には嬉しくてたまらなかった。

彼女と別れる日が近づいていると思うと彼の胸は痛んだ。オルリコは両親を亡くしてから生きて行くために張家に仕えてきた。生き延びるために双子の我儘を聞き、世間から笑い物にされてもそれに耐えてきた。その彼女が関という名のある商人に嫁ぐ。彼女がようやく手にした幸せの切符を奪うことなど絶影にはできない。まして彼には彼女を幸せにしてやる自信など微塵もない。彼は自分のことで精一杯だったし、彼自身も仕事の中にいつ命を落とすとも分らない。先行きの知れない自分の人生に、安定した暮らしが約束された彼女を巻きこむことなど絶対にできないと思った。

野宿続きの四日間の後、晋粥の隊商宿に辿り着いた一行は街へ出て各々で夕食を取るようになった。オルリコを一人で歩かせるわけにもいかなないので、彼は彼女を誘って情報通の黄老と出会った楽笑飯店へ行くことにした。

ちょうど夕食時なので楽笑飯店の席は八割以上埋まっていた。黄老は初めて会った時と同じ奥の席でひとり酒を飲んでいた。そう言

えば、一番奥が指定席だと誰かが言っていた気がする。

「寿春酒家のどら息子が刃傷沙汰起こしたって知ってるか？二週間ほど前だ」

絶影とオルリコの顔を見るなり、禿げ頭の老人はそう言うてにやりと笑った。相変わらず仙人のような風貌だ。

「さあ。知らねえな」

にっつと笑い返しつつ絶影は黄老の向かいに腰を下した。

「無事にシャナドゥーまで行って帰って来られたようだな」

「ああ、黄じいさんのおかげだ。ありがとう」

「なに、赤兎には借りがあるからな」

絶影とオルリコは適当に食事を注文し、黄老へ草原で盗賊に襲われたことや遊牧民サルキーンの助けを借りてシャナドゥーへ辿り着いたこと、シャナドゥーの祈りの木が言い伝え通り七色に光り輝いたことを話して聞かせた

「ほほう、その遊牧民の歌っているのはどんな歌なんだ？」

黄老は、万里の長城を眺めながらサルキーンが歌った歌に興味を持ったようだった。絶影はオルリコの顔を見た。彼はその歌をあまり覚えていなかったが、彼女は覚えていたようで小さな声でそれを歌った。

「おれたちが馬に乗るのは

地平線の向こうを夢見ているから

無限の可能性を手に

草原や砂漠を抜け

大河や海原を越え

青天や星空を駆けまわりたいから」

そこまで歌ったところで彼女ははっとして歌うのをやめた。店内の客という客が、いや、給仕の娘までもが彼女の歌に聞き入っていたからだ。絶影も彼女の隠れた才能に仰天してしまった。

「ひょっとして君、むっちゃくちや歌がうまいんじゃない？……？今まで誰かに言われなかった？」

「な、ないよ。人前で歌うの恥ずかしいから苦手だし」

オルリコは顔を真つ赤にしてうろたえた。

周りからは「よっ姉ちゃん、続き歌えよ！」などと野次が飛ぶ。

黄老からも先を歌ってくれと促され、彼女は渋々、けれどさつきより大きな声で歌った。

「おれたちが旅をするのは

万物が移りゆくことを知っているから

頭の上を流れる白い雲

沈んでゆく大きな夕日

瓦礫と化した男たちの夢の跡

今を生きることだけをその胸に誓っているから」

オルリコの声が大きくなった。何だか楽しそうに見える。微笑みを浮かべて歌う彼女の歌を、客たちは箸を止めてうっとり聞いている。

「ごらん、非力でちつぽけな人間が

馬に乗った途端にどんな山も越えてゆけると笑う」

とうとうオルリコは立ち上がって店中に声を響かせ始めた。

「ごらん、つまらなそうに走っていた馬が

乗り手を得た途端に生き生きと野を駆けまわっている」

歌う彼女の横顔を眺め、絶影は胸が苦しくなるのを感じた。明日の夕方には暁都へ辿り着くことになっている。これが彼女と過ごす最後の夜だ。二人とも暁都で暮らしているとはいえ、住む世界の違う者同士だ。今後、彼が彼女と顔を合わせることはないだろう。彼女の声を聞くこともなければ、歌を聞くこともない。

彼は彼女の姿を目に焼き付けておこうと思った。彼女の瞳や唇や耳の形や背格好をしつかり覚えておこう、彼女の声を耳に残しておこうと、この二週間の旅のことを胸に刻み込んで忘れないようにしようと思った。

「人は馬に自由を与え

馬は人に自由を与える

おれたちが旅をするのは

与え、与えられ、ともに自由になれるから」

彼女が歌い終わると拍手が沸き起こった。厨房から店主が現れ、食事代を奢るからもう何曲か歌ってくれと彼女を説得し始める。気が付くと店は満員御礼になっていた。すっかり気を良くしたオルリコが店の中央に立って暁都で流行っている歌を歌い始めると、黄老は絶影に耳打ちした。

「駆け落ちは上手くいきそうか？」

絶影は餃子を喉に詰まらせそうになった。

「恋仲になっただろう？」

彼は今度こそむせた。慌てて牛乳茶を喉に流し込む。

「……あの子、三日後に結婚するんだ。関飛って商人知ってる？」

「知つとるさ。おまえみたいなチビツ子よりよっぽど男前でしかも将来有望だ」

自覚のあることでも他人から言われると傷つくものだ。ぐさりと胸に突き刺さった言葉を噛みしめる絶影を黄老は面白そうに眺めた。

「だが、おれはおまえの方がよっぽど好きだがね」

絶影は面食らった。

「おまえ、あの子に聞いたのか？俺と関飛のどっちが好きなんだって」

「……聞けるわけないだろ。そんなの、関飛に決まってる。俺は売れない用心棒、関飛は将来有望な商人。関飛の方があの子を幸せにできるに決まってる」

「なぜそんなことが言える？おまえがどう決めつけようと、あの子がおまえの方がいいと言えばおまえの勝ちだ。それに、あの子を幸せにできるかどうかも大事だが、何よりおまえさん自身が彼女と一緒にいて幸せかどうかを考える。気持ちを伝えなかったことを後悔せんようにな」

黄老は酒の入った湯のみを煽った。オルリコはまだ歌っている。いつからか手拍子が彼女を包んでいた。一生懸命に歌う彼女の姿を

見つめ、絶影はまた胸が締め付けられるような気持ちになった。そんな彼の気持ちを知ってか知らず、黄老は強い口調で言った。

「与え、与えられ、人は互いに自由にも幸せにもなるものだ。彼女はおまえさんに幸せを与えてくれるんだろう？それなら、彼女にも聞いてみる。俺と一緒にいて幸せかってな」

その答えはもう知っていた。

七色に光り輝く祈りの木の上で彼女と口づけしたことを思い出す。だが、オルリコの性格からして、きっと彼女は彼を選ばないだろう。彼女は今まで苦労した分、確実に安定した人生を望むはずだ。いつ帰らぬ人となるか分からない用心棒の夫など、欲しくはないだろう。

「おまえに良いまじないをかけてやろう」

黄老はそう言ってため息をつき、絶影の首の後ろや肩甲骨の間を両手の数本の指で同時に押した。

「痛ってえ！」

激痛に悶絶する彼を置いて黄老は立ち上がって店を出て行く。

「はっはっは、健闘を祈るぞ、チビツ子」

黄老が去ってからしばらくしてオルリコが絶影の隣に帰って来た。「こんなに大勢の前で歌ったのも、こんなに人から何かを褒められたのも初めて！」

機嫌良く牛乳茶をあおり、彼女はにこにこ笑いながら夕食の続きを食べ始めた。店主は次々とサービスの品を運んで来てはオルリコを褒め、絶影は黙々とそれを平らげた。楽笑飯店を後にしたのは夜更けだった。

店を出た途端、悪寒がした。絶影はどきりとした。自慢ではないが生まれてこの方、風邪など数えるほどしか引いたことがない。特に子供の頃は、ひ弱そうな見かけによらず病氣知らずで有名だった。「まさかな」

笑い飛ばした途端、くしゃみが出た。

「大丈夫？」

オルリコが心配そうに彼の顔を覗きこむ。

「平気平気」

手を振って見せた瞬間、眩暈がした。

「全然、平気じゃないじゃん」

よろけた絶影をオルリコはしっかりと支え、二週間前に泥酔した彼にしたように彼の腕を自分の首にかけさせた。二人で過ごす最後の夜なのになんという情けない展開だろう。

「君、すごく熱いよ。熱がある」

「まさか」

言いながら、身体の調子がさがる悪いことに彼は気が付いていた。一体どうしてしまったんだろう。目の前がぐらぐらと揺れ、足腰が立たない。オルリコが店の中に戻って誰かに手を貸してくれと頼んだようだ。絶影の意識はそこで途切れた。

目覚めると隊商宿の寝室だった。暗闇の中で瞬きを何度か繰り返す。

隊商宿では床に雑魚寝が基本だ。男女別に分かれた大部屋で数十人の仲間や他の隊商の旅人と眠る。しんと静まり返った宿に響き渡る数十人分の鼾や寝息や身じろぎや歯ぎしりや寝言は圧倒的だった。密集し閉ざされた部屋の中に、人間の生命がぎゅうぎゅうに詰まり、息づいている。

再び意識が朦朧として、絶影は眠りに落ちた。

次に目覚めた時には朝になっていた。仲間の鼾も聞こえず、傍らにはオルリコがいた。

「……俺、寝坊したのか？」

それだけを訊ねるのも億劫なほど身体がだるい。起き上がることでできず、絶影は横になったままオルリコの顔をぼんやりと見上げ

た。

「隊商には先に暁都に帰ってもらったよ。私たちは、君の熱が下がってから帰ろう」

オルリコは優しい声色で言い、絶影の額に冷たい布を乗せた。瞳を動かして辺りを見ると、そこは雑魚寝用の大部屋ではなく狭い個室だった。彼が寝かされているのも床ではなく寝台だ。

「だめだよ。君、結婚式に遅れるよ」

絶影は何とか起き上がろうとして寝台に手をついた。全く力が入らないが、衛世館の用心棒がそんな甘えたことを言っではいられない。

「大丈夫、結婚式は明後日だから明日帰れば間に合うよ。だから少し休んで、ね？」

言い聞かせるように彼をなだめ、彼女は彼の顎まで毛布を引き上げた。オルリコの指が絶影の髪に触れ、ゆっくり、そつと撫でる。子供扱いされているようで癪だが、何とも心地よかった。彼はまた眠りに落ちて行った。

「私、行くね。最後の仕事を全うしたいから」

夢だろうか。

「ごめんね」

現実だろうか。

はっとして絶影は飛び起きた。傍らにオルリコの姿はなく、窓から差し込む日はすでに高い。身体は相変わらず重いが立ち上がるこ
とができた。ずいぶん長い間、眠っていたような気がする。

彼はよろめきながら個室を転がり出て、廊下を歩いていた管理人を捕まえた。

「今日、何月何日だ?!」

絶影の剣幕におののきつつ、管理人は日付を答えた。オルリコの結婚式の前日だ。

「あのお嬢ちゃんなら昼前に一人で馬に乗って出て行っただよ。それまでずっとおまえさんの看病してたんだぜ。なあ、悪いこと言わないから、もう一泊していけよ。宿代は負けて……あ、おい！」

今から走っても、オルリコには追いつけない。暁都の閉門時間にも間に合わない。オルリコの結婚を止めることもできなければ、彼女と一緒にすることもできない。

何もかも分かっているのに、荷物を背負って厩舎に飛び込み、馬に鞍をつけて飛び乗り走り出す自分を止められなかった。夕暮れの草原の中、赤兎に連れられて家を出て行く幼い俺を、走って追ってきた母さんもこんな気持ちだったのかもしれない。絶影は今ならその気持ちが分かると思った。俺が衛世館に売られていくことを止められなくても、それでも母さんはどうしても俺を追いかけたかったんだ。どうしても。どうしても。

「——信じてるよ」

初めて会った日、彼女は絶影にそう言った。衛世館に帰る道すがら、彼は何度もその言葉を思い出しては喜びを噛みしめ、細長い雲が幾筋も浮かぶ真っ赤な西の空を眺めながら、人生で初めて、自分が手にした仕事を誇らしく思ったのだ。

そして己に誓った。きっと彼女を護ってみせる、と。

『最後の仕事を全うしたいから』

オルリコはそう言って出て行った。

『一度やると決めた仕事を途中で投げ出したくない。どんなにくだらない仕事でも命を賭ければそれだけの価値が生まれると思う』

雨上がりの草原で、彼女はそう言っていた。

『俺には分かんない』

その時彼はそう答えたが、今なら分かる気がする。

絶影は手綱を握りしめて愛馬の脇腹を蹴った。

8・君と／暁都

ぎらりと輝く太陽が頭の真上まで昇る。

馬に跨り草原を疾走しながら、オルリコは気持ち焦るのを感じた。結婚式は明日だ。何が何でも今夜までに暁都へ帰らなければならない。暁都の閉門時間は日没だ。

いつだったか、絶影が人馬一体の境地などオルリコとは無縁だと言っていた。だが、今の馬の状態を襲歩しゅうほと呼ぶのではないだろうか。明らかに駢歩かけあしより速く、何より、彼女は馬との一体感というものを味わっていた。

それはまるで自分の下半身と馬の背が繋がったような気分だった。どこかの国の神話を読んでいて上半身が人間で下半身が馬という生き物が出てきたが、今の彼女の感覚はまさにそうだったものだ。『じゃあ、すぐにうまくなるよ。君の身体を流れる血が、馬や草原をきつと覚える』

初めて馬に乗った日に両親が遊牧民だと明かした彼女へ絶影がそう言って笑ったことを彼女は思い出した。もうずいぶん昔のことのように思えたが、たった二週間前のことだ。

私の身体を流れる血。二週間前にそうしたように、オルリコは手綱を持った自分の掌に一瞬だけ意識を向けた。父が、母が、何千人の祖先たちが、この大草原を馬と共に渡ってきた。与え、与えられ、自由を手にしながらか生きて来た。今の私もきつとそうだ。

緑の草原の地平線を睨む。馬の脇腹を蹴る。己の身体を流れる祖先の血に祈りを捧げる。自分と馬の鼓動が、体温が、呼吸が、すべてのリズムが重なって一体となる。足の裏から爽快な気持ちがこみ上げてくる。まだまだ、ずっと走り続けたい。もっと速く、どこまでも遠くへ。

地平線の向こうに何があるかなんて分からない。でも、先のこと分からないと嘆くのはやめて、何があるか分からないからこそ、

どんな未来も思い描けるんだと思えばいい。

どんな未来も。

「きやああ!!」

突然、視界がひっくり返った。動物の巣穴に足をとられ、馬が転倒したのだ。馬は鼻を地面に打ち付け、オルリコは左肩から草の上に転落した。彼女が起き上がった時には馬は立ち上がって暁都に向かつて走り出していた。

「待って！お願い！」

さっきまでの一体感は何だったのか。与え、与えられて自由になる仲じゃなかったのか。無情にも逃げて行く馬のお尻を見つめながらオルリコは涙を飲んだ。こうなったら暁都まで歩くしかない。日は傾き始めているが、閉門には間に合うかもしれない。

悔し涙を堪えて歯を食いしばり、オルリコは草原を歩き始めた。

膝丈の草をかき分けるように大股で進みながら、彼女は絶影の母親の話を思い出した。彼は今でも草原で、自分を追い駆けて来る母親の姿を探してしまうと言っていた。

オルリコの母も優しくかった。もちろん父も。両親が不治の病にかかってから、彼女は必死に生きる立てを考えた。その答えが結婚だった。経済的にも精神的にも夫に支えられ、自分の母がそうであったように子供に愛情を注いで生きていけたらいいと思った。その未来がもう少して手に入るのだ。こんなところで挫折するわけにはいかない。

オルリコは黙々と草原を歩いたが、無心ではいらなかった。考えるのは隊商宿に残して来た絶影のことばかりだった。

『仕事の価値とか、意味とか、考えるのやめたの。俺は俺の仕事を全うする。君は君の仕事を全うする。とりあえずは、それでいい気がする』

雨上がりの草原で彼がそう言ってくれた時、オルリコは本当に嬉しかった。自分のやっていることを彼が控えめに肯定してくれたような気がしたのだ。彼は約束を違えず、どんな時も彼女を護ってく

れた。ならば、彼女も自分の仕事を全うしなければ。

『幸せってこと？』

祈りの木の上で、絶影はオルリコの額に自分の額をくっつけてきた。思い出しながら、オルリコの頬は熱くなる。間近で見る彼の瞳は馬の目のように綺麗で優しかった。二人は黙って見つめ合い、お互いの高鳴る心臓の音や呼吸の音を聞いていた。これまでの人生で、あんなに甘美な時間はなかった。

『君、本当にあいつと結婚するの？』

彼は静かに訊ね、答えようとしたオルリコの唇を自分の唇で覆った。

もしもあの時、彼の問いに即答していれば、こんなに苦しい気持ちを味合わずに済んだのかもしれない。でも、私は何と答えることができたろう？

——今でさえ、同じ質問をされたら何と答えていいかわからないのに。

オルリコは自分の気持ちに気が付いて愕然とした。

目を閉じると柔和な絶影の顔と昼間のような明るさで虹色に輝く祈りの木が臉に浮かぶ。絶影と手を繋いで眺めたあの光景を、彼女は生涯忘れない。

——そんな自分が、関に嫁いでいいのだろうか？

——生きて行く手立ては、本当に、関と結婚することだけだろうか？

——せっかく彼が肯定してくれた仕事を私はここで辞めてしまうのか？

暁都の青龍門をくぐったのは夕暮れ時だった。疲れ切った身体に鞭打ち、オルリコは何とか張家まで辿り着いた。玄関に足を踏み入れると真っ先に金華と銀河が出迎えてくれた。

「オルリコだ！おかえりなさい！シャナドゥー、楽しかった？」

「オルリコだ！おかえりなさい！私たちの布、見つかった？」

双子は彼女に力いっぱい抱きつき、質問攻めにした。今まで我儘で困った子供たちだと思っていた二人に、今は好意しか感じなかった。

「はい、これが金華さんの。これが銀河さんですよ」

祈りの木から取って来た布を二人に渡していると、他の使用人たちがほっとしたような顔で現れた。結婚式の前日まで戻らない彼女を、みんな心配していたようだった。

「お二人とも、私のために願い事を書いて下さって、どうもありがとうございます。シャナドゥーは素敵な町で本当にとっても楽しい旅でした」

本当に素敵で、本当に楽しい旅だった。

甘い思い出が今でも胸を熱くするほど。

「おかえり、オルリコ。無事でよかったよ」

騒ぎを聞きつけて姿を見せたのは長い間屋敷を留守にしていた張だった。彼女の結婚式に合わせて久しぶりに帰って来たのだ。オルリコは居住まいを正して彼を見上げた。張は赤兎と同年代の壮年の男だ。優男を絵に描いたような彼が、用心棒を絵に描いたような筋肉隆々の赤兎と親しいらしいと聞いた時は疑わしく思ったものである。

「張さん、お話があります」

オルリコが切り出すと張は何かを悟ったように穏やかに頷いた。

「いいよ」

おいでと言って張は応接室の扉を開いた。金華と銀河を廊下に残し、オルリコは彼と二人で部屋に入った。椅子を勧められ、彼女は遠慮なく腰を下した。着ていたデールが泥だらけだということに気が付いたのは座ってからだったので知らないふりをすることにした。「オルリコ、顔を見せてごらん。うん、いい顔してる。やっぱり旅は人を変えるね」

張は柔らかに微笑み、彼女の顔をじつと見つめた。オルリコは一瞬だけ躊躇い、思い切って言った。

「私をもう少し、ここで働かせて下さい」

張は困ったような渋面をつくった。

「結婚するのが嫌になったのかい？ そういった結婚前の不安感というのは女性にはよくあることらしいよ」

結婚式の前夜に婚約の破棄を申し出ればさすがの関も怒るに違いない。張と関の関係が悪くなれば、それは張の仕事に少なからず影響を及ぼすだろう。それは分かっていたが、どうしてもこのまま嫁に行く気持ちにはなれなかった。

「そういうことではないんです。私は今までやり過ぎるように、ごまかすように仕事をしてきました。与えられた仕事を最小限の労力でこなし、仕事を終わらせるためだけに仕事をしていました。生きて行くためには仕方がないことだと諦めるように」

双子の我儘を聞くのが仕事。生きて行くために仕方なくするものが仕事。今まで、彼女はそう思っていた。隣町へ飴玉を買いに行くのも、的頭村へ石ころを拾いに行くのも、仕方なく嫌々やっていたから、彼女は双子の真意に気が付かなかったのだ。双子の心には、オルリコに対する好意しかなかったのに。

「でも、シャナドゥーへ旅して思ったんです」

絶影と出会って思った。オルリコは彼の言葉を思い出す。

『俺を信じてくれるって言うてくれた君を、命を賭けて護ろうと思つた』

命を賭けて。彼の気持ちに心が高ぶった。

「真剣に、心をこめてお仕えしたいです。これから張さんや金華さんや銀河さんに、今まで御世話になった恩返しがしたいです」

私の幸せを願ってくれた双子のために、私を引き取って面倒を見てくれた張のために、命を賭けて仕事をしたい。オルリコは祈るような思いで張の返事を待った。

張はゆったりと椅子の背にもたれて息をついた。

「それを関のところで作るわけにはいかない？僕たちへの恩返しという気持ちで、彼を支えてやることはできない？関は君をとて気に入ってるんだよ」

「それはできません。申し訳ありません」

オルリコは深々と頭を垂れた。

「好きな男でもできたのかい？」

彼女は頭を下げたまま頬を染めた。顔を上げて張の顔を見るのが恥ずかしかったので、そのままの態勢でこっくりと頷く。

「仕方ないね。分かった。とりあえずは君が病気で結婚式を延期すると伝えておくから、正式な婚約破棄は後日、一緒にきちんと話をつけに行こう。私だけ行くと大喧嘩になるから君にも来てほしい。関は本当に君にぞっこんだから」

オルリコは思わず腰を浮かせた。まさか張がこんなにあっさりと承諾してくれるとは思ってもみなかった。もしも彼が頷いてくれなければ、彼女は朝まで説得を続ける覚悟でいたのだ。

「あ、ありがとうございます！結納金の分も、精一杯お仕えます！」

喜びも露わに誓いを立て、オルリコはちらりと窓の外を見た。まだ日が沈んでいない。今から走れば市門の閉門時間に間に合う。衛世館に寄って馬と用心棒を借り、夜通し走れば朝には晋粥に着くだろう。

「あの、私、急ぎの用事があるので失礼します！」

慌ただしく張の屋敷を飛び出したところでオルリコは赤兎にぶつかった。

「おおっと！——あん？なんでえ、帰って来てたのか？」

腹筋でオルリコの顔を受け止めた赤兎は首をかしげつつ、彼女の顔を覗きこむ。オルリコは手早く状況を説明した。

「あの阿呆、最後の最後にしくじりやがったな。よし分かった、あいつは俺が迎えに行く。おまえさん、明日結婚式なんだろ？張に聞いたぜ」

「いえ、私、結婚はやめたんです。だから私も彼を迎えに行かせて下さい」

真つすぐに赤兎を見上げて請うと彼は困ったように眉を下げた。

「しょうがねえな。じゃ、馬を用意しなけりやな」

一度衛世館に立ち寄り、二人は馬に乗って青龍門へ急いだ。閉門時間が迫る門に辿り着くと、そこには不自然な人だかりができていた。乗り手のいない馬が嘶いてまるで何かを主張しているようだった。

「曹操！曹操じゃねえか！」

よく見るとそれは絶影の愛馬だった。赤兎は曹操に駆け寄り、騎乗したまま手綱をつかんだ。

「よしよし、そうかそうか、あいつをどっかで落つこととして来ちまっただんな？」

ところが、曹操はなおも嘶き、頭を市門へ向けた。オルリコは市門の外へ目を向けて目を凝らした。ずっとずっと先の石畳の上に誰かが倒れている。

「赤兎さん、見つけた！」

オルリコは馬を駆って市門を飛び出し、倒れている人影に向かって襲歩で疾走する。あんなに熱があつたのに、彼はオルリコを追ってここまで走って来たのだ。そう思うと、胸が熱くなった。

「絶影！！」

感極まって大声で叫ぶ。オルリコは速度を落として彼のそばで馬を止めた。高熱のあまり意識を失って落馬したのだろう、絶影はぼろぼろの姿で倒れていた。彼女は素早く馬から下りて絶影を抱き起こした。絶影は薄っすらと目を開けてオルリコを見た。

「……このまま夜になって、狼に食われたらどうしようかと思ってた」

「そしたら自業自得だよ、馬鹿！こんな無茶して！」

弱弱しく笑った絶影を抱きしめると、彼の身体は火の玉のように熱かった。

「君のこと追いかけてながら、母さんのことを考えてた。もしも母さんがずっとずっと、暁都まで俺を追って走って来てくれていたら、赤兎は俺を家に帰してくれたかもしれない。俺は家に残ることができたかもしれないってさ。馬鹿だろ、俺」

絶影はゆつくりと首を動かし、夕焼けに染まる小麦色の草原をぐるりぐるとおもむろに見渡した。草原には冷たい風が吹き、膝丈の草をそよがせるばかりで人影のひとつも見えない。

「君のこと追いかけてながら、俺は赤兎に連れられて行く幼い自分自身を追いかけてた。母さんになったつもりでさ」

絶影はオルリコの背中に両腕を回した。熱い掌が背中に触れ、彼女は彼を抱きしめる腕に力をこめた。

「もう手遅れだって分かってたけど、諦めなくなかった。最後まで護りたかった。君を」

オルリコは首を横に振って彼の頬に自分の頬をくつつける。

「護ってくれたよ。私も君も無事に暁都へ帰って来られたもの。それに、私、結婚するのやめたんだ」

「え？」

絶影は彼女から身体を離し、きょとした顔でオルリコを見つめた。

「それ、本当？」

彼女は思わず笑ってしまった。

「うん。もう少し今の仕事を続けたいと思ったから。君のおかげだよ」

張は、旅は人を変えと言っていた。でも、本当は違う。

旅が人を変えるのではない。

旅で出会った人々が、人を変えるのだ。

絶影、黄老、劉、イラーナ、サルキン。彼女はこの旅で出会った人々の顔を思い出す。彼らは世の中での自分の役割を心得て、主体的に生きていた。いつでも受け身で生きてきた彼女にとって、彼らの生き方はとても眩しかった。彼女も、自分の道を自分で選びた

いと思った。乗馬に慣れない頃の彼女のように自分の馬が誰かの馬のお尻について行くのを待つのではなく、自分で馬を操って自分で選んだ道を走りたかった。

「それに君のことが好きだから。誰かと寄り添って生きるなら、私は君がいい」

オルリコが思い切って告げると、絶影はぽかんと口を開けた。彼女は恥ずかしくなって立ち上がり、馬の手綱を取って鐙あぶみに足をかけた。

「いけない、門が閉まっちゃうよ。後ろに乗って」

絶影に手を貸し、彼女は彼を自分の後ろに座らせた。彼は力なく彼女のお腹に手を回して寄り掛かり、彼女の肩に自分の顎を置いた。オルリコはときどきしながら馬の脇腹を軽く蹴り、ゆっくりと青龍門に向けて歩き始めた。

「俺はさ」

暁都の都城の向こうへ燃えるように真っ赤な夕日が沈んでいく。

二人でそれを眺めながら、絶影は静かに口火を切った。

「俺は、この通り危険な仕事をしてるし、しかもはつきり言って半人前だ。今回のことで自分が外見だけじゃなくて正真正銘の半人前だって痛いほど分かった。でも」

けたたましい鐘の音が鳴った。門が閉まる合図だ。

「俺も、誰かと寄り添って生きるなら、君がいい」

絶影はそう言って馬の上で身乗り出し、オルリコの唇に自分の唇を重ねた。彼女は目を閉じ、遠くで鐘の音を聞きながら、不治の病に倒れた両親の傍では思いつかなかったことを悟った。生きて行くためには、生きて行く手立てが必要だが、誰と生きて行くかということも同じくらい重要だ。

「一緒に生きたい。君と」

二人は相手の頬に自分の頬をくっつけてくすくすと笑い合い、絶影は疲れ果てた身体でオルリコを力いっぱい抱きしめた。ここまでともに旅をしてきた身体と身体が馬の上でびったりと重なる。

与え、与えられ、この自由とこの幸せがいつまでも続くようにと祈りながら。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6227o/>

シャナドゥーの歌と馬

2010年10月31日19時55分発行